

昭和62年度発掘調査概報 I

茨木市教育委員会

はしがき

遠い昔、人々が野山を駆けめぐり、自給自足をし、自然を対象に生活をしていた頃の茨木は、どのような環境であったのでしょうか。

これまでにわかっていることは、既に今から1万年も前に人間の足跡が、この地にあり、さらに、縄文時代の終り頃には農耕生活をはじめ、その後、それを土台にして多くの人々が住み始め、高度な技術と高い文化をもっていたということであります。

そういった昔を知る手がかりとして、土に埋もれ眠っている埋蔵文化財は、現代の私達に、当時の人々の生活状態や自然の環境を教えてくれる貴重な資料であります。

しかし、こうした昔を知る手がかりである埋蔵文化財も、開発の波におされて消え去ろうとしています。

そこで、今に生きる私達は、今まで残されてきた貴重な文化遺産を、後世に引き継ぐ重大な責務を担っていることを、あらためて認識するとともに、いっそう心して保護・顕彰していくかなければならないと考えます。

ここに、まとめました埋蔵文化財の発掘調査概報は、昭和62年度に実施した発掘調査のうち、東奈良遺跡2カ所、中条小学校遺跡1カ所、郡遺跡1カ所、太田石山古墳の調査を合冊して報告するものです。

本書の刊行にあたり、調査に従事された方々や、ご協力をいただきました多くの関係各位に、心から感謝の意を表しますとともに、今後とも、本市文化財の保存・保護についてなおいっそうのご指導とご援助・ご協力をお願い申しあげる次第であります。

昭和63年3月

茨木市教育委員会

教育長 中 平 敏

例　　言

1. 本概報Ⅰは、東奈良遺跡・郡遺跡・中条小学校遺跡・太田石山古墳における昭和61年12月から昭和62年9月までの発掘調査結果の概要をとりまとめたものである。
2. 発掘調査にあたっては、郡遺跡(87-1)を茨木市教育委員会社会教育課主査奥井哲秀、東奈良遺跡(87-2・3)、中条小学校遺跡(87-1)、太田石山古墳を茨木市教育委員会事務局文化財調査員(嘱託員)井上直樹が担当して実施した。

整理作業は、昭和62年4月から昭和63年3月まで実施した。発掘調査と整理作業には、中東正之、藤原弘喜、大戸井浩一郎、桑原紀子、田中良子、早川博子、森木芳子、峯松皓代、国分佐知子、西坂泰子諸氏の協力を受けた。

3. 発掘調査を実施するにあたっては、医療法人恒昭会、山文商事、丸山良雄、宮田吉雄、滝本武一、滝本シヅ子の各位に御協力いただいたことに感謝します。
4. 本概報Ⅰの執筆は、本文を各担当者が、遺物実測は郡遺跡(87-1)を国分、東奈良遺跡(87-2・3)を井上・国分、太田石山古墳を井上、遺物写真の撮影を井上が担当して行った。また、発掘調査並に本概報発刊にあたっては、田代克己、免山篤、中沢義明、大船孝弘、森田克行諸氏のご指導・ご助言を受けた。
5. 東奈良遺跡の地区割りは、昭和47年設定のものを使用している。

本文目次

はしがき

例　言

| | | |
|-----|----------------------------|----|
| I | 茨木市の遺跡の概観 | 1 |
| II | 都遺跡（87-1） | |
| 1. | 調査経過 | 3 |
| 2. | 層位 | 3 |
| 3. | 遺構 | 3 |
| 4. | 遺物 | 4 |
| 5. | 結語 | 4 |
| III | 太田石山古墳（86-1） | |
| 1. | 調査経過 | 5 |
| 2. | 層位 | 6 |
| 3. | 墳丘 | 6 |
| 4. | 周濠 | 7 |
| 5. | 葺石 | 7 |
| 6. | 暗渠 | 8 |
| 7. | その他 | 8 |
| 8. | 遺物 | 8 |
| a. | 埴輪 | |
| | 円筒埴輪 | |
| | 形象埴輪 | |
| b. | 鉄斧 | |
| 9. | 結語 | 10 |
| IV | 中条小学校遺跡（87-1） | |
| 1. | 調査経過 | 11 |
| 2. | 層位 | 11 |
| 3. | 遺構 | 11 |
| 4. | 遺物 | 12 |
| 5. | 結語 | 12 |
| V | 東奈良遺跡（87-2）II・N II-5-I・M地区 | |
| 1. | 調査経過 | 13 |
| 2. | 層位 | 13 |
| 3. | 遺構 | 14 |

| | |
|---------------------------------|----|
| 4. 遺物 | 16 |
| 5. 結語 | 17 |
| VII 東奈良遺跡 (87-3) H・N F-5-E・I 地区 | |
| 1. 調査経過 | 18 |
| 2. 層位 | 18 |
| 3. 遺構 | 19 |
| 4. 遺物 | 20 |
| 5. 結語 | 20 |

図 版 目 次

- 図版 1 (上)郡遺跡(87-1)全景(南側から)
 (下)太田石山古墳(86-1)全景(北側から)
- 図版 2 (上)太田石山古墳(86-1)全景(東側から)
 (下)太田石山古墳(86-1)全景(南東側から)
- 図版 3 (上)太田石山古墳(86-1)東側葺石群
 (下)太田石山古墳(86-1)東側葺石群
- 図版 4 (上)中条小学校遺跡(87-1)全景(北側から)
 (下)東奈良遺跡(87-2)H・N H-5-I・M地区南側地区全景(南側から)
- 図版 5 (上)東奈良遺跡(87-2)H・N H-5-I・M地区北側地区全景(南側から)
 (下)東奈良遺跡(87-3)H・N F-5-E・I 地区全景(北側から)
- 図版 6 (上)東奈良遺跡(87-2)H・N H-5-I・M地区堀
- (下)東奈良遺跡(87-3)H・N F-5-E・I 地区溝-2・3、柱穴跡
- 図版 7 (上)太田石山古墳(86-1)出土の円筒埴輪
 (下)太田石山古墳(86-1)出土の朝顔形埴輪
- 図版 8 (上)太田石山古墳(86-1)出土の衣蓋形・形象埴輪
 (下)太田石山古墳(86-1)出土の形象埴輪・鉄斧
- 図版 9 東奈良遺跡(87-2)H・N H-5-I・M地区自然水路出土の土器
- 図版10 東奈良遺跡(87-2)H・N H-5-I・M地区自然水路出土の土器・堀
- 図版11 東奈良遺跡(87-2)H・N H-5-I・M地区自然水路出土の土器
- 図版12 東奈良遺跡(87-2)H・N H-5-I・M地区自然水路・
 土壤-1 出土の土器
- 図版13 東奈良遺跡(87-2)H・N H-5-I・M地区自然水路出土の土器・石器

- 図版14 東奈良遺跡(87-3)H・N F-5-E・I地区包含層、
溝-1・2出土の土器
- 図版15 東奈良遺跡(87-3)H・N F-5-E・I地区包含層、
溝-2・3出土の土器
- 図版16 東奈良遺跡(87-3)H・N F-5-E・I地区包含層、
溝-1・2・3出土の土器・石器
- 図版17 茨木市の遺跡
- 図版18 各調査地区位置図
- 図版19 郡遺跡(87-1)
- 図版20 中条小学校遺跡(87-1)
- 図版21 東奈良遺跡(87-2)H・N H-5-I・M地区
- 図版22 太出石山古墳(86-1)東側葺石群
- 図版23 太出石山古墳(86-1)
- 図版24 東奈良遺跡(87-3)H・N F-5-E・I地区
- 図版25 太出石山古墳(86-1)出土の円筒・朝顔・衣蓋形埴輪
- 図版26 太田石山古墳(86-1)出土の形象埴輪・鉄斧
- 図版27 東奈良遺跡(87-2) H・N H-5-I・M地区自然水路出土の土器
- 図版28 東奈良遺跡(87-2) H・N H-5-I・M地区自然水路、土壤-1 出
土の土器
- 図版29 東奈良遺跡(87-2) H・N H-5-I・M地区自然水路出土の上器
- 図版30 東奈良遺跡(87-2) H・N H-5-I・M地区自然水路出土の上器・
石器
- 図版31 東奈良遺跡(87-3)H・N F-5-E・I地区包含層、
溝-1・2出土の上器
- 図版32 東奈良遺跡(87-3)H・N F-5-E・I地区包含層、
溝-2・3出土の土器・石器・土製品

挿 図 目 次

(ページ)

| | | |
|--------|-----------------|------|
| 挿図-1～4 | 井戸-1 出土の上器..... | (4) |
| 挿図-5 | 南壁面土層写真..... | (12) |
| 挿図-6 | 甕棺墓..... | (15) |
| 挿図-7 | 甕棺-1 | (17) |
| 挿図-8 | 甕棺-2 | (17) |

I 茨木市の遺跡の概観

茨木市は、北に古生層で形成された標高300m前後の丹波山地、西には標高50m前後の大阪層群で形成された千里丘陵、東と西には隣接市である高槻市・摂津市の平野部とともに沖積層の三島平野が広がる、南北に長く、東西に短い市域を成している。市内を流れる河川は、安威川・佐保川・勝尾寺川・元茨木川(現在庵川)があり、いずれも北部の山地部を源として屈曲しながら流れ、合流して大阪湾へとそいでいる。このように恵まれた環境のもとで、原始から活発な人々の活動がみられた。

茨木市付近で人類の最初の活動がみられるのは、旧石器時代の終り頃である。山間部の初田、丘陵部都の太田・福井・郡遺跡で国府型ナイフ形石器・有舌尖頭器が発見されており、また安威川東岸の郡家今城・塚原・津之江南遺跡などからも旧石器が発見されていることから、少數ながらも人々の活動があったことが裏付けられている。

続く縄文時代も遺跡は少ないが、近年の発掘調査によって、耳原遺跡から晩期(滋賀里III・V式)の斐宿墓16基、半礼遺跡から晩期(滋賀里IV、船橋式)の水田跡と井堰が発見されている。その他、断片的な遺物としては、東余良遺跡から前期(北白川下層式)の爪形文土器、中期の石棒が出土している。また初田・高槻市柱本・塚原・吹田市岸部・箕面市奥などでも発見されている。さらに今後、縄文時代の遺跡が発見される可能性も高く、特に日本最古の井堰が発見された半礼遺跡周辺に期待が持たれている。

弥生時代になると全国的に遺跡数が増えるが、茨木市においても肥沃な沖積平野から多數の遺跡が発見されている。前期から始まるものとしては、耳原・東奈良・目塙遺跡、高槻市の柱本・安満遺跡などがある。中期以降には沖積平野だけでなく、丘陵上、山間部まで遺跡が広がり、郡・中河原・太田・中条小学校・溝昨・春日・倍賀・石堂ヶ丘遺跡などがあり、高槻市では郡家川西・天神山・芝谷遺跡などがある。このように弥生時代は、遺跡が広範囲に広がるとともに、巨大化するものも表われ、活発な人々の活動がみられるようになる。

その中でも東奈良遺跡は、弥生時代前期から中世まで一貫して存在する遺跡で、高槻市の安満遺跡と同じく母村的集落と考えられている。また近年、東奈良遺跡周辺の開発が進むとともに、発掘調査も市内では最も多く実施していることから、遺跡の状況の把握が最も進んでいる。東奈良遺跡の地形は、千里丘陵沿いに広がる沖積平野がゆるやかな傾斜で北西から南東へ低くなってしまっており、西部を千里丘陵を源とする大正川、東部を元茨木川が流れ、遺跡の東から南に広大な低湿地を形成している。この地形を既成調査から細かくみると、遺跡内に谷や微高地が存在し、特に現在の中央環状線沿いに存在する大きな谷は遺跡を東西に二分している。この谷の東と西では地質も異なり、東側は標高7~8mの微高地が広がり、上部洪積層の位置も浅く、排水性の良い沖積層上に遺構が立地する。それに対

して西側は、標高差はあまりみられないものの、上部洪積層の位置も深く、沖積層も含水性の高い複雑な砂層や粘土層上に遺構が立地している。

弥生時代前期中葉頃、人々は谷の東側の低湿地を臨む散高地に環濠をもった集落に定住を開始した。また、環濠外には方形周溝墓を主体とする墓域、貯蔵穴や木器溜めなどが作られ、当初からその目的に応じた地を選んで村が作られた。同中期には、環濠を外へ広げて集落は拡大し、集落の東南元茨木川沿いには銅鋸・銅戈・勾玉を鋳造する工房もつくられた。この集落は、古墳時代前期頃まで続き、それ以降は規模を縮小しながらも中世まで続く。それに対して、西側は現在のところ前期の集落はみられず、東側の集落の墓域と考えられる方形周溝墓群がみられるのみである。同中期になると、散在した住居がみられるようになり、東側の環濠に対して多数の大小の溝を北西から南東に向かって築造するようになる。西側が規模を拡大するのは、弥生時代から古墳時代の過渡期である。この頃、幅10m・深さ2.5~3mの大溝を築造し、その東側に住居をつくり、西側には土塙墓群がつくられた。

東奈良遺跡は、弥生時代中期中葉頃・大盛期を経え、中条小学校・駅前・上中条遺跡などの分村が茨木川沿いにみられるようになり、相互に依存しあいながら発展していく。

古墳時代には、北部の山麓と西部の千里丘陵帯に多くの古墳が築造される。前期の紫金山・将軍山古墳の前方後円墳、安威0.1号墳、中期の太田茶臼山(伝繼体陵)・太田右山古墳、後期の南塚・青松塚・海北塚・耳原・将軍塚古墳、安威・新羅・郡古墳群、末期の上寺山古墳(火葬墓)・初田1号墳・阿武山古墳などの二鳥古墳群の一角を形成する古墳の宝庫が存在する。現在の所この時期の集落は、郡・太田遺跡以外に明確な遺跡が発見されていないが、弥生時代以来の集落が小規模ながら散在していたものと思われる。

律令体制に入ってからは、市域は島下郡に属するようになり、この中に新野、宿人(久)、安威、總積の四郷がある。その都衙は、都付近にあったと推定されており、近年の発掘調査によって同時期の遺構、遺物が検出されつつある。また、飛鳥時代から奈良時代頃にかけて創建された氏族寺院の總積・太田・三宅庵寺があり、太田庵寺からは瓦・礎石・舍利用具が検出されている。その他、火葬を示す資料として、安威大鐵冠山から三彩軸轄骨器が発見されている。(図版-17)

II 郡遺跡(87-1)

1. 調査経過

所在地 茨木市郡三丁目 6-27

調査面積 約221m²

調査期間 昭和62年1月26日～同年2月10日

届出理由 共同住宅建設

郡遺跡は、名神茨木インターチェンジ付近に位置する。これまでの調査から、弥生時代（畿内第Ⅱ様式）から、古墳時代・奈良時代以降の遺構・遺物を含む遺跡であり、その範囲も、かなり広いものと思われる。

昭和48年の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓や住居跡・古墳時代の削平された平地古墳・奈良時代の掘立柱建物・溝などが発見され、また旧石器時代の国府型ナイフ形石器なども発見されている。

さらに、「郡」という地名からして、島下郡の郡衙の可能性が考えられるところでもある。現在、郡の村の中心部を亀岡街道が南北に走り、集落は、これにそって並んでいる。その北端は西国街道が東西に走っていることから、この地は、古代から重要な位置にあることがわかる。

2. 層位（図版-19）

当調査地区の基本層位は、上層から耕土（約15cm）、床土の黄色土層（約6cm）黄褐色砂土層（約22cm）、須恵器・瓦器の小片などを含む茶褐色土層（約20cm）と続き、その下層が黄褐色粘質土層の生活面（地山）となる。故に現地表面下約60cmの深いところである。尚、生活面の標高はO・P・約23.0mを測るが、後世の平地化により、生活面が削平されていると考えられる。

3. 遺構（図版-19）

当調査地区で、検出された遺構は非常に少なく、落ち込みが2か所、井戸が1基、不定形のピット数個のみである。

落ち込み-1・2

落ち込み-1と2は、木掘の部分で連なり（図版-19）、かなり蛇行した1条の溝的な性格をもつものと思われるが、落ち込み-2の南側で流れがとまる。故に東へと流れるところから、地形が西から東へと傾斜していることから、溝は浅くなり消えていくものと思われる。

内部の堆積土は、上層で黄褐色の小粒の砂ジャリ層、下層で大粒の黄褐色の砂ジャリ層

が堆積し、鉄分を含んだ固い層である。

井戸 - 1

直径約1.2m・深さ約0.8mの規模をもつ井戸で、暗灰色の粘土層が堆積し、最下層より瓦器碗が出土している。(挿図 - 1 ~ 4)

4. 遺 物

全体的に遺物は極端に少なく、摩耗の激しい小さな土師器片、須恵器片、瓦器片が包含層中より、ナイロン袋に半袋程度しか出土していない。井戸内からは、12~13世紀の瓦器碗(挿図 - 1 ~ 4)が出土している。

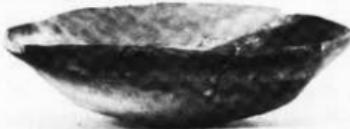
5. 結 語

当調査地区は、都遺跡の範囲にあたると思われるが、やや高台に位置しており山側(西)から平地部(東南)へと傾斜する地形が平地化のためかなりの削平をうけている地区であると考えられる。

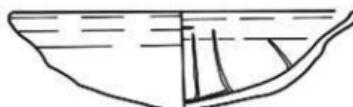
また、遺跡の中心部と思われる場所からは、北西山側へ約300mも離れているところから、遺跡のはずれになると考えられる。

このことは、遺跡・遺物ともに少ないとからも合せ考えられるものである。

遺構としては、12~3世紀の瓦器片が出土した井戸がある。なぜここに存在しているのかは単独の検出であるため不明である。



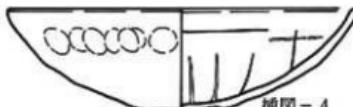
挿図 - 1



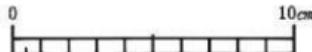
挿図 - 3



挿図 - 2



挿図 - 4



井戸 - 1 出土の土器

III 太田石山古墳（86-1）

1. 調査経過

所在地 津木市花園町二丁目6-1

調査面積 650m²

調査期間 昭和61年12月8日～昭和62年1月26日

届出理由 病院建設

太田石山古墳の調査は、昭和42年10月22日から同年10月26日までの4日間のトレンチ調査が最初である。この調査は、当時すでに太田石山古墳として存在を知っていたにもかかわらず、藤原運輸株式会社が総合ターミナル建設の目的で墳丘を削平しているのを郷土史家が発見し、茨木市教育委員会に連絡したものの、職員が現場に到着したときにはすでに墳丘(残存墳丘は、高さ約5m、径約20mの略矩形を成していた)は、完全に削平されていた。そのため、古墳の規模・形態確認のための6ヵ所のトレンチ調査を実施したのみに終った。しかし、このような調査にもかかわらず、調査員免山篤氏の努力により古墳の規模の確認、副葬品・埴輪・葺石などを検出し、多大なる成果が得られた。(注1)

その後、この運輸会社も移転し、古墳の南側に恵昭会アイノ花園病院が建設されることになった。その時の試掘調査では、古墳に関する遺構・遺物、他の遺跡も発見されなかつた。昭和61年には、病院が手狭になつたため北側への増築が計画された。同年11月27日に建設予定地で試掘調査を実施したところ、葺石と残存墳丘が検出されたことから、病院側と茨木市教育委員会とで協議した結果、古墳の範囲(周濠を含む)内を調査することになった。

太田石山古墳は、市域の北東端の阿武山山麓に位置し、高槻市に接している。古墳周辺の地形は、近年の開発によって大きく変化しているが、明治の地図では阿武山山麓の台地と宮田台地の間の、東から西へ低くなる浅い谷状地形の標高27m付近に立地する。北側には、安威川左岸の7ヵ村に灌漑用水を供給する五社水路が掘られている。

太田石山古墳の付近には、南北約300mに亘る最大の前方後円墳である太田茶臼山古墳(伝繼体天皇陵)と8基の古墳や陪塚が位置し、北東の尾根には土室古墳群があり、東から開鶴山・西之原・番山・石塚・土保山・二子山の各古墳が連なっている。太田石山古墳は、土室古墳群の西端の最も低地に位置する。また、太田石山古墳の南側一帯は、弥生時代から古墳時代の太田遺跡があり、律令制下には中臣太田連が皇室の屯田の統率者として居住していたと考えられ、その氏族寺院であった太田庵寺が検出されている。

(注1) 石山古墳 茨木市文化財資料集第9号 茨木市教育委員会

2. 層 位 (図版-23)

太田石川古墳の層位調査は、北と西壁面、中央から南東にかけてのセクション面で行い、最終的には残存墳丘の断ち割り調査も実施した。

その結果、残存墳丘と旧耕土面上には約0.7~1.0mの上が盛られており、南と南東側の旧耕土面が、北側のそれより約0.6m低いために、墳丘の封土によって約0.8~1.0mさらに盛られている。耕土下には、淡灰色(淡緑灰色・淡黄褐色)砂質層の床土。埴輪片を含む暗灰色(暗茶褐色)砂質層あるいは粘質土層が堆積し、以下周濠内には黒色(暗灰色)粘土層がみられ、周濠外では淡灰色の砂層あるいは砂質層が堆積していた。さらに下層は、砂層がレンズ状に厚く堆積し、中央セクションではその下層が青灰色粘質土層であった。それに対して墳丘部は、3~4層からなる洪積砂疊層と砂層・粘土層であった。

これらの点と周辺の試掘状況から、古墳は阿武山山麓の洪積砂疊層上に構築し、北から南へ、東から西へ低くなる浅い谷に堆積した沖積砂疊層をわずかに掘り下げて周濠を作ったものと思われる。古墳の北と西側に関しては、今回は調査地区外であったため不明であるが、洪積砂疊層を掘り下げて周濠を作ったものと考えられる。

3. 墳 丘 (図版-23)

墳丘は、前述したように昭和42年の運輸公社建設のときに削平を受けており、さらにそれ以前から水田地拡張のために墳丘の根がかなり削り取られているとのことであった。このため、今回の調査では当初から墳丘の検出は望み薄であり、事実倉庫の基礎あるいは工事の時の擾乱によって、原形はほとんど留めていなかった。最終的には、残存墳丘の東西と南北の断ち割り調査によって、古墳の構築の一部が推定できるのみであった。

墳丘の形態は、昭和42年以前まで、葺石基底石から3~4mの内側までが水田拡大のために削り取られ、略矩形を成していた。また、当初耕土面から約5mあったとされている墳丘は、昭和42年の削平によって東側の耕土面から0.4m、南側からは0.8mを残すのみであった。

残存墳丘の断ち割り調査は、周濠底以下までの約1.8mを掘り下げて実施した。その結果、20層以上に分けられる層位がみられ、その状態から人工的に盛られた上でなく、自然の洪積砂疊層・同砂層・同粘土層であった。この層位の中で、残存墳丘最上層の暗茶褐色砂質層は、非常に固く緻密しており、墳丘の封土を盛る時にその基底になる地山を固めたとも考えられる。これらの点と層位の項で記述した点から、太田石山古墳の墳丘は東、南、西から1m程高かった地形を整形し、そのうえに4m程の盛り土を行ったと思われる。この盛り土は、昭和42年の破壊のときに南側の低い耕土面に造成されており、他の場所から運ばれたと思われる粒子の整った淡黄褐色砂質土であった。

4. 周 漢

周漢は、昭和42年の調査のときにも明確に検出されなかつたが、今回も填丘側は葺石基底部から緩やかな傾斜で掘られている。濠肩が検出されたものの、外肩(外堤)側は濠が自然に浅くなる程度にしか検出されなかつた。特に、外堤は平面でも断面でも全く検出されなかつた。このことは、昭和42年の調査報告で免山氏が記述されているように、水田地を開発する時に削平されたのか、あるいは当初よりなかつたものとも考えられるが、いずれも定かでなく、もし削平されたとすればかなり古い時期であったと思われる。

今回確認された周漢の規模は、葺石基底部を基準とした場合、幅10.5m、深さ0.4~0.6mを測る。濠底から0.2~0.3m程まで黒色粘土が全面に堆積し、さらに填輪片を包含する茶灰色(茶褐色)粘質土あるいは砂質土が周漢を越えて堆積していた。周漢の下層は崩位の項でも記述したように、砂層・粗砂層・粘土層がレンズ状に複雑な堆積をしており、填丘の下層と異なり沖積層、それも自然水路のような状態がみられた。

これらの点から周漢は、阿武山山麓の低位段丘と富田台地との間の深い谷にできた自然水路の跡を巧みに利用して作ったと思われる。周漢には、周漢下層に堆積した黒色粘土から、水が溜められていたと思われる。その後、古墳の破壊が始まり、封土を利用して周漢を埋め、填丘の周囲を水田地に開発したのであろう。

5. 蔽 石

葺石は、今回の調査では東から南東にかけての約18mの間で、葺石の個のみが現位置を保って検出された。南側でも葺石を検出したが、近世・近代の暗渠によって破壊・移動されていた。検出された葺石は、前述のように基底部のみが多く、最も幅の広いところでも4~6列の約0.8mであった。基底部は、長軸(0.2~0.4m)を填丘面に平行して、据えるように置かれていた。それ以外は、長軸を平行あるいは直交して斜めに積み上げ、その間に小型の石を埋め込むようにして、不規則に積まれていた。今回検出された葺石には、葺石間を粘土で固めたものではなく、淡灰色(黄褐色)砂質土上に葺かれていた。葺石面の傾斜角は、約10°~14°と浅い角度を測ったが、周辺の状況から、本来の傾斜角でないかも知れない。

葺石の基底部のレベルは、東側から南側へ緩やかに下がり約0.35mの差があり、これは周漢底のレベルにもみられ、原地形の影響と思われる。

葺石の石材は、ホロンフェルス化した粘板岩・砂岩で、付近の洪積層の礫ではなく、安威川流域から採集されたものと考えられる。(図版-22)

6. 暗渠

暗渠は、床土下に溝を掘り、枝を折った竹や木を敷き、その上に石を組み上げて排水溝としたものである。組み上げる石は、青石を利用したものと思われ、下段に大きな石を敷き、上段に小さな石を敷いている。今回検出された暗渠は、南西部のみに見られ、幅0.3m、深さ0.3m前後の規模のものをT字形に作っている。南・西へ低く作られていることから、地形の高低を利用して南・西の低地へ湿润な耕地の排水を行って、土地改良を実施したものと考えられる。作られた時期は、近世末～近代頃と思われる。

7. その他

主体部は、残存墳丘面で精査を試みたが、建物の基礎穴や土砂取りの穴が認められたものの、全く残っていないかった。なお、昭和42年度の調査では、石室構造や粘土壁でなかったと報告されている。

8. 遺物

出土遺物は、円筒埴輪片を中心に形象埴輪・土師器・須恵器・鉄斧片が約1700点であり、そのうち土師器・須恵器片は10数点、鉄斧は1点のみである。そのいずれもが原位置を保つものがなく、墳丘外の耕土面下の暗灰色(暗茶褐色)砂質層あるいは粘質土層、青石の間、暗渠の間で検出されたもので、細片化・風化・摩耗の著しいものばかりであった。

a. 墓輪

円筒埴輪(図版-25)

円筒埴輪(朝顔形埴輪を含む)片は、1600点以上出土しているが、細片化しており接合しても円周の5%～6%程度であり、タガの間隔を測るもの、透孔が認められるものもなかった。胎土は、クサリ疊・長石・石英を含み、特に金雲母を含むことから、太田石山古墳北東の高槻市土室産の埴輪でなく、河内産のものと思われる。(注2)色調は、長年の風化と水田下にあったことから、黄灰色化しているが、比較的残存状態のよいものは赤黄色である。また、外面には黒斑がみられるもの、極めて稀であるが赤色顔料を塗付しているものがある。

円筒埴輪片の大多数は、円筒部中位の破片であり、口縁部は僅かに4点のみであった。その中で口縁部を復元できるのは、図-5のみで、口縁径35.6cm測る。形態は、口縁部まで垂直に立ち上がり、端部で横ナデによる僅かな外反がみられ、面取りを施し、外部に肥厚している。同底部も僅かに4点のみで、図-7は底径33.3cmを測り、底端部が外面に僅かに肥厚し、弱く横ナデが行われている。底部から3.5cmまでは1次調整の横ハケが残るが、他は2次調整の横ハケが行われている。また、底部から最下段のタガまで15cmを測る。図-8は、底部から内凹ぎみに立ち上がり、底端部は外面に肥厚し、弱く横ナデが行われ

ている。底端部内面にヘラ削りがみられ、外面は1次調整の縦ハケが残り、底径32.0cmを測る。図-99は、底径23.6cmを測り、底端部が内面に肥厚し、外面調整は風化のため不鮮明であるが、横ハケと思われる。

円筒部中位は、図-6が径30.5cmを測り、外面は横ハケ、内面は縦ハケ調整がなされている。タガ部の内面は、内面に押し出されたようになっておりハケも消えている。

タガは、横ナデによって端面が内弯するものと、平面のものがあり、断面は台形であるが、あまり鋭さはない。タガの出は0.75~1.0cm、頂幅0.7~1.1cmを測る。

朝顔形埴輪は、小破片で約13点確認された。図-1~3は、口縁部が一度屈曲し、さらに大きく外反し、屈曲部外面に断面コの字形の張り付けの突帯があげぐる。復元図は、小破片のため誤差があると思われるが、径56cmを測る。また、屈曲部の接合面には、いずれの面にも接合を強くするための、ヘラによる刻印がみられた。

太田石山古墳の円筒埴輪は、外面調整は1次が縦ハケ、2次は横ハケが行われ、底端には2次調整を行わないものがあり、内面調整は縦ハケ、指ナデ、指おさえが行われている。タガは、断面台形であるが、縦線に鋭さを欠くようになる。朝顔形埴輪は、壺の頭部に当たる部分が細く、同じく胴部に当たる部分の肩に張りがある。しかし、タガ間の長さ、透孔の形態が不明である上、点数も少ないため太田石山古墳の埴輪の編年は困難であるが、先の特徴から5世紀前半頃と考えられる。

形象埴輪（図版-25・26）

今回検出された形象埴輪の中で形態が判明するのは、衣蓋・家形埴輪のみである。しかも、他の埴輪と同じく細片が多く、復元できるものはなかった。

衣蓋形埴輪は、笠部の破片3点と立飾りの細片2点が確認されたのみである。笠部の図-13は、笠端部から台部との接点までの部分で、接合面の状態から、笠部に台部を接合する手順で作られている。笠部上面には、2本以上の円周が7.3cmの間隔を開けて線刻され、その間に幅広い間隔で放射状に、円周を境に僅かにずれながら線刻がされている。笠端部は、器壁の厚みが薄かったのか、端面を強く横ナデし、肥厚した部分を上面に折り曲げて厚みを増している。調整は、風化のため不鮮明であるが、上面は横ハケ、下面は指ナデと思われる。

立飾りは、点数も少なく細片であることから推定の域を出ないが、その端面の角度から立飾りの先端部と思われ、両面に2本(1本のものもある)の平行する線刻が描かれている。(図-9・10)

家形埴輪と思われるものは、11点あり、その多く屋根部である。図-16~21は、網代葺きの線刻が行われている。図18と20は、棟の部分で、図20は棟と妻の接合部と思われる。図14は、その形態から破風板の上端部と思われる。図15は、軒部と思われ、軒先に平行して1条の線刻が行われている。また、體体が一部残っていることから、屋根の流れの勾配は約70°を測る。図23は、厚さ2.8~3.1cmと厚く、断面がL字形であることから、四方

隅の柱部片と思われる。図22は、2.0~3.1cmの低い円柱の上に都廻台のような平坦部が付く、円柱の中心の内側よりから上方へ伸びる痕跡が残ることから、家形埴輪の基底部と考えられる。

(注2) 高槻市埋蔵文化財センター 大船孝弘技師の御教示による。

b. 鉄斧 (図版-26 図-27)

鉄斧は、残存墳丘上から出土したが、他の遺物と同じく原位置から出土したものではない。全長11cm、刃部幅6.5cm、残存重量252gを測る。柄部は、鉄板を折り曲げた断面構造形の完全な袋状になっており、納挿入部の長さ4.5cm、内径3×1.8cmを測る。

9. 結 語

今回の発掘調査の結果、前述のようにかなり破壊されている上に、調査範囲の限りもあって、昭和42年度調査を上回るものは得られなかつた。太田石山古墳の規模は、葺石濠で径28mの円墳(あるいは前方後円墳の後円部)で、幅10.5mの周濠を有していることが判明した。しかし、前方後円墳の可能性は、今回の調査でも確認できなかつた。古墳の築造年代は、川土埴輪から、前回考えられていた時期(5世紀後半)よりやや古く5世紀前半頃と思われる。南に近接する太田茶臼山古墳が、昭和62年度調査によって出土した埴輪から5世紀中頃と考えられていることから、太田石山古墳がやや古くなる。また、東側に連なる土室古墳群との関係は、土室古墳群が東の高い尾根から西の低い尾根に向かって、4世紀から6世紀にかけて順次造られたと考えられていることから、太田石山古墳の位置・築造時期が東の土保山・二子山古墳より古いのに、最も西の低いところにある点など問題があり、関連性は薄いと思われる。太田石山古墳は、前回の調査で出土した鉄鏟から太田茶臼山古墳の陪塚とも言われているが、築造時期と古墳間の谷の存在から、その可能性に問題があると思われる。いずれにしても、太田石山古墳は、5世紀前半頃築造された周濠を持ち、葺石・埴輪を廻らした円墳あるいは前方後円墳であることが、今回の調査で判明したのみであった。さらに今後、太田石山古墳の前方部と考えられている所(現在宅地になっているが、造成が成されているため古墳の基底部・周濠は破壊されていないと思われる)の調査、あるいは周辺遺跡・古墳の調査の結果報告が成されることによって、既に破壊されている太田石山古墳の不明な部分も解明されると思われる。

IV 中条小学校遺跡（87-1）

1. 調査経過

所在地 茨木市小川町71-1、8、9、11

調査面積 115m²

調査期間 昭和62年6月15日～同年6月24日

届出理由 共同住宅建設

今回発掘調査を行った茨木市小川町は、中条小学校遺跡の東端部、東奈良遺跡の北端に隣接している。中条小学校遺跡は、新中条町の中条小学校付近を中心に、南北約0.8km・東西約0.4kmの西中条・下中条・小川町に広がる弥生時代中期から古墳時代にかけての遺跡である。周辺には、南に東奈良遺跡、北へ向かって駅前・上中条・春日・倍賀・郡遺跡などが連なっている。中条小学校遺跡の中でも小川町一帯は、現在までの調査から古墳時代中期以降の遺跡が比較的多い所と判明しており、今回の調査地区の南100m付近では同時代中・後期の土壙・溝・柱穴跡が検出されている。

昭和62年6月3日、マンション建設に伴う埋蔵文化財確認調査依頼によって、試掘調査を実施したところ、茶灰色粘土の包含層と黄白色粘土の生活面を検出した。包含層からの遺物の出土は僅少であったが、周辺の発掘調査の状況から遺構の存在が充分予想されるため、発掘調査の必要性があることを依頼者に報告する。その後、依頼者と茨木市教育委員会とで2回にわたって協議を行い、同年6月15日から発掘調査を実施することが決定した。

2. 層位（図版-20）

当地区の基本層位は、上層から約1.2mの造成土、耕上、灰色砂質層、青灰色砂質層、淡茶灰色砂質粘土層、淡茶灰色粘土層、茶灰色粘土層の堆積がみられた。茶灰色粘土層には、弥生時代後期から中世初頭にかけての土器片が包含されていた。生活面は、黄白色粘土で標高(O・P)約8.9～9.1mである。

3. 遺構（図版-20）

当地区から検出された遺構は、上壙2基、柱穴・杭跡13穴と調査前に予想していたよりも少なく、またその規模も小型のものばかりであった。

土壤

土壙-1は、長軸0.92m、短軸0.45m、深さ0.16mのすりばち状楕円形土壙である。土壙-2は、長軸0.92m、短軸0.5m、深さ0.17mの梢円形土壙である。いずれも、茶灰色粘土が堆積していたが、遺物などは全く検出されなかった。

柱穴・杭跡

柱穴・杭跡はいざれも、円形・橢円形をなし、径(長軸)が0.15~0.5m、深さ0.6~0.28mを測る小型のものばかりである。土壤と同じく、茶灰色粘土の堆積がみられたが、遺物などは全く検出されなかった。また、建物を復元できるものもなかったが、柱間1.5mを測る杭列と考えられる柱穴が北東から南西に連なっている。

4. 遺 物

当地区から出土した遺物は、弥生式土器・須恵器・土師器片が約80点のみである。その中で、時期が判明するのは、5世紀末頃の須恵器の脚台片と杯身の口縁部片のみであり、図示できるものではなかった。

5. 結 語

今回の調査では、検出された遺構・遺物ともに非常に少なかった。この状態は、小川町の北側一帯でみられ、特に西側の新中条町一帯と小川町でも東奈良遺跡に近いところに比較して少なくなっている。この状態が、本来遺構の少ないところであるのか、あるいは中世以前の削平によるものかは定かでないが、包含層出土の遺物が摩耗している点と遺構の深さが浅い点から後者の可能性が高いと思われる。



挿図-5 南壁面土層写真

V 東奈良遺跡 (87-2) H・N H-5-I・M地区

1. 調査経過

所在 地 津木市沢良宣西一丁目 3-12

調査面積 88m²

調査期間 昭和62年9月2日～同年9月16日

届出理由 ガソリンスタンドのタンク埋設

H・N H-5-I・M地区は、東奈良遺跡の南西部に位置する。これまでの発掘調査によって、東奈良遺跡の弥生時代から古墳時代にかけての地形が、おおよそ復元されるようになった。それによると、現在の中央環状線沿いに東奈良遺跡を二分する谷が存在し、H-5-I・M地区はその谷の西側の肩部に位置する。谷の西側には、弥生時代前期の方形周溝墓群をはじめ、同中期の住居跡・方形周溝墓・溝、同後期から古墳時代前期の住居跡・土壙墓群・溝などが多数検出されている。H-5地区一帯は、その中でも谷沿いであることも関係して、弥生時代中期から古墳時代前期の溝、特に大型の溝が集中するところであり、谷の広がりも関係して今回の調査地区以東、以南では同時期の遺構は非常に少なくなる。

当調査地区は、昭和46年12月にも同じくガソリンスタンド建設に先立ってトレンチ調査を実施している。(東奈良遺跡調査概報Ⅰ・昭和54年)その当時は、東奈良遺跡発見当初であり、調査期間に制限があったこともあって、古墳時代前期の壺棺墓と平安時代墳の柱穴跡が検出されたのみであった。しかし、その後の付近の調査によって、さらに深いところに弥生時代中期の遺構面が存在することが確認されるようになった。今回の調査は、既設のガソリンスタンドの改築工事に伴う発掘調査であるため、既に平安時代の遺構面は破壊されているところが多かったことから、下層の弥生時代から古墳時代の遺構検出のみを行った。しかし、遺構面が深さ3mと深いためによる涌き水の上に、もろい土と東側の中央環状線を通行する大型車両の振動によって、土砂崩壊が絶えず起こる調査であった。

2. 層位(図版-21)

当調査区の層位は、前述のように上砂崩壊のために、タンク埋設地区の一部と廐油タンク埋設箇所で行った。基本層位は、1.0～1.2mの造成土下に耕土が僅かに残存し、以下緑灰色砂質層(床土)、淡黄灰色砂質粘土層、茶灰色(黃色)砂質粘土層、赤黄色(暗黃色)粘質土層に分けられた。それより下層は、北と南で大きく異なり、南では灰色砂層、暗灰色砂質層、そして遺構面の緑灰色砂質層がみられた。北側地区では20層以上に分けられる砂層・粗砂層・粘質土層がレンズ状に0.7～1.2m堆積しており、大型の溝状遺構となる。北側地区の遺構面は、溝肩では南側と同じく緑灰色砂質層であるが、溝底では青灰色粘土

と黒色粘質土の互層に変わる。なお、南側の地区での遺構面の標高(O・P)は、北から南へ低くなっている、5.00～5.15mを測り、北側の地区では溝肩が約5.00m、溝底の最も低いところで約4.30mを測る。南側の地区的暗灰色砂質層からは、弥生時代中期から古墳時代前期の上器が、北側の地区では溝状遺構の暗灰色砂質層、黒色粘質砂層と灰色・白色粗砂層から同時代の上器が多数出土した。

ちなみに、昭和46年度調査で検出された平安時代の遺構面は赤黄色粘質土層であった。

3. 遺構

南側の地区からは柱穴跡4穴、北側からは幅18m以上の自然水路1基、上塙1基、要棺墓1基が検出された。

自然水路

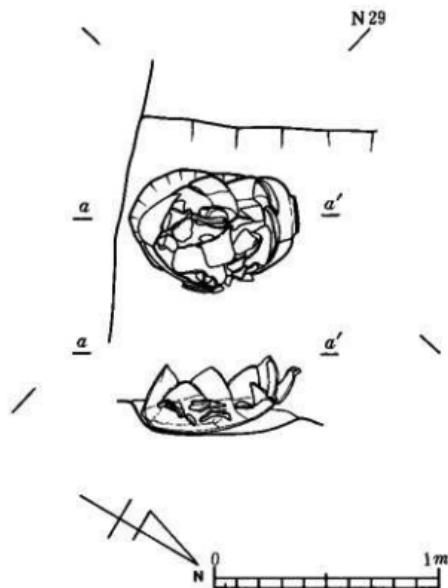
自然水路は、北側地区の南端で溝肩の一部を検出した。全容は調査地区外へ広がるために定かでないが、幅18m以上・深さ0.7m以上の北西から南東に連なる大形のものと考えられる。調査地区内で見る限りの自然水路の形態は、南側の肩からやや急傾斜で落ち込むのに対して、北側からは自然に地形が低くなる程度に下がっており、水路の最も低いところも南肩よりにある。自然水路の堆積層の状態は、前述のごとく度重なる土砂崩壊のため一部しか確認できなかったが、その一部と調査中の観察によれば、20層以上の粘土と砂質層の互層がみられた。それも大別すれば、南北両肩沿いに黒色(暗灰色)粘質土層と中央を流れる2条の灰色(白色)砂層の堆積層になる。また、各層から多量の弥生時代中期(畿内第II様式)から古墳時代前期の土器が出土した。調査中は、それを層位別に取り上げるのは困難であったため、粘土層と砂層に分けて取り上げた結果、層位的に下層に位置する黒色(暗灰色)粘質土層からは弥生時代中期(畿内第III～IV様式)が多く出土し、上層の灰色(白色)砂層からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多く出土した。また、自然水路南肩の黒色粘質土を掘り込んで埋葬された畿内第IV様式の要棺墓と上塙が各々1基検出されている。

これらの点からこの自然水路は、前述の東奈良遺跡を二分する大きな谷に向かって、北西の微高地からの水が流れ込んで水路が作られた。その後、この水路も畿内第IV様式頃に粘土によって埋まり、要棺墓や上塙が作られたが、古墳時代前期頃より自然水路ができるものと考えられる。

要棺墓(挿図6～8)

要棺墓は、自然水路に堆積した黒色粘質土と南肩の一部を掘込んで、要棺を埋葬するための上塙を作っている。要棺は、要棺-1が畿内第IV様式の高さ54.5cm・口径33.9cmと同一-2が同48.2cm・34.0cmの2個の要を転用している。要棺は、その出土状態が2個の要を直交させたようになっていた点と、また後日要を復元した時に、下側に位置していた大きい方の要棺-1の最大腹径の所の破片がなく、大きく穿孔された様になっていた点から、

2個の甕を合せ口の様にしたものでなく、一方の甕の一部に大きな穴を穿ち、その穴にもう一方の甕の口を直交させるように合わせたものと考えられる。しかし、残存状態が悪かった点とその例もないことから、あくまでも推測の域を出ないのが残念である。また、甕棺を埋葬するための土塚の規模は、黒色粘質土の面では埋め土が同じ土であったため検出できなかったが、地山面では長軸0.72m・短軸0.45m・深さ0.14mの楕円形土壙が残存していた。なお、甕棺の口と土壙の長軸は、磁北よりやや西に振っている。(挿図-6)



挿図-6 甕棺墓

土壤

上層は、甕棺墓に並行して水路肩に掘られており、残存規模が長軸1.8m・短軸0.8m・深さ0.55mを測る楕円形すりばち状の土壤である。内部には、黒色粘土が堆積しており内第III～IV様式の土器(ミニチュアの高杯・図版-28 図-38)などと未完製品の石斧の柄が出土している。

柱穴跡

南側の地区から検出された柱穴跡は、楕円形・方形・円形のものがあり、いずれも一辺(径)が0.2~0.3m、深さ0.15~0.35mを測る。しかし、調査範囲が狭いので、どのような建物であったのかは復元できなかった。

4. 遺 物

当調査地区からは、コンテナーパットに約20箱出土したが、その多くは自然水路から出土したものであり、その上だったものを記述する。

弥生式土器

壺形土器(図版-27 図-28~35)29は、頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。口唇部は上下に肥厚し面をもち、雑な櫛描波状文・同直線文を施す。頸部中段から体部にかけて縦ハケ整形を行い、同じく雑な櫛描波状文・同直線文を施す。28は、算盤玉状の体部に大きく外反する口縁部と短い頸部がつき、口唇部は上下に肥厚し面をもち櫛描波状文を施す。頸部から体部には櫛描波状文・同直線文を交互に施している。31・33は、いずれも算盤玉状の体部に大きく外反する口縁部と短い頸部がつき、口唇部は上下に大きく肥厚細い凹線文を施す。頸部から体部には櫛描直線文・同波状文を施している。30は、球形の体部から小さく外反する口縁部と短く細い頸部がつき、口唇部は下方に大きく拡張し、細い凹線文と円形浮文を施す。その他、頸部に指つまみの貼り付け凸帯文を施す34などがある。28~31・33・34は、畿内第III~III(新)様式のもので、いずれも自然水路下層の黒色粘質土層・同砂質層出土である。35は、球形の体部から小さく外反する口縁部と短い頸部がつき、口唇部は小さくヒ下に肥厚し、内傾する面をもつ。頸部中段から体部中段にかけて横・縦の規則正しいハケ整形が行われており、畿内第V様式のもので、自然水路上層の灰色砂層出土である。

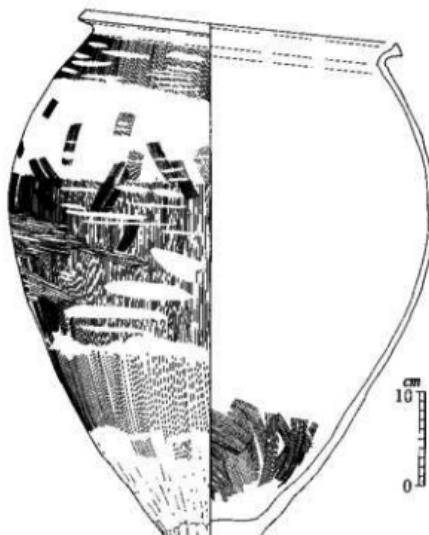
壺形土器(図版-28 図-37・43~47 挿図-7・8)43と44は、口径と最大腹径にあまり差のない形態を成し、口縁部はくの字形に外反し、口唇部で上方につまみ上げている。体部はいずれも細かい縦ハケ、43は下位にヘラ削りを行っている。45~47は、最大腹径が口径より大きく、胴長の形態を成し、口縁部はくの字形に外反し、45は口唇部が僅かに肥厚する。体部には、叩きが3段あるいは2段に分けて行われ、45のみが下位にヘラ削りを行っている。挿図-7・8は、堀宿として転用されていたもので、腹部のはった卵形の体部に、くの字形に短く外反する口縁部をもち、口唇部が僅かに肥厚する大型品である。体部中・下位まで縦・斜めハケ、底部にヘラ削りが行われている。45~47は、畿内第V様式の自然水路上層灰色砂層出土、その他は畿内第III~III(新)様式の同下層黒色粘質土層出土、堀宿は畿内第IV様式である。

台形土器(図版-30 図-58~62)59は、全体の1/3程が出土した。器高11.8cm、台部径24.3cmを測り、台部上面はヘラ磨き、脚部外面は縦ハケ整形を行っている。58は、台部が脚

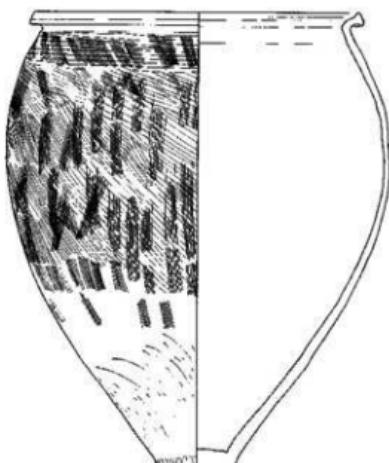
部から大きく張り出し、台部径25.6cmを測る。それに対して、60~62は、台部の張り出しが小さいタイプもある。

5. 結 語

当調査地区から検出された甕棺墓は、不安定な低湿地の自然水路内に埋葬されていたが、このような例は東余良遺跡では多く、当調査地区に隣接して実施した昭和46年度の調査でも、弥生時代中期の包含層である黒色砂質土を掘り込んだ古墳時代前期の甕棺墓が検出されている。そのほか、方形周溝墓、木棺墓、土壙墓なども居住地に比較して低地を選んでいるが、それらは墓域が決められているのか、群を成して検出されているのに対して、甕棺・甕棺墓は思わぬ所から単独あるいは2基程度で検出されることが多い。



挿図-7 甕棺-1



挿図-8 甕棺-2

VI 東奈良遺跡（87-3）H・N F-5-E・I 地区

1. 調査経過

所在地 津木市東奈良三丁目357-1

調査面積 150m²

調査期間 昭和62年9月7日～同年10月7日

届出理由 共同住宅建設

H・N F-5-E・I 地区は、津木市の遺跡の概観で記述した東奈良遺跡を二分する谷の東側にあたり、その谷沿いに位置する。

当調査地区の北約150mには、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての環濠集落、北500mから東30mにかけて環濠集落を取り囲むように方形周溝墓群、東100～200mにかけて貯蔵穴群が検出されているところである。そのほか、昭和61年度には、当調査地区の西側に接したところで、弥生時代中期の木棺墓2基・壺棺墓2基・溝などが検出されている。（昭和61年度発掘調査概報Ⅰ・津木市教育委員会 以下昭和61年度調査地区として記述する）

2. 層位（図版-24）

当調査地区での層位調査は、西側壁面を利用し実施した。しかし、調査中の土砂崩壊と造成する際の擾乱が一部遺構面まで達していた関係から、不明確な箇所がある。

層位は、30層以上に分けられた。この層位を観察すると、平面では擾乱のため確認できなかつたが、遺構面が3面ある様子が見られる。第Ⅰ遺構面は耕土面下0.6～0.7mの淡灰色粘土層、第Ⅱ遺構面は同面下1.3～1.4mの灰色・灰青色粘土層、第Ⅲ遺構面は南側が低く、同面下1.6～1.7mの灰色粘土層、北側は第Ⅱ遺構面と同じ灰青色粘土層・灰色砂質層であった。第Ⅰ遺構面・第Ⅱ遺構面は共に層が一定せず、特に4条の溝周辺は砂層・粘土層がレンズ状に堆積し、遺構面を削平している。これらの点と各層からの出土遺物から、弥生時代中期（畿内第Ⅲ～Ⅳ様式）頃、北から南に低くなった傾斜地に溝が東西方向に作られ、その後幾度かの洪水などによってこの付近一帯に土砂が堆積したが、溝は凹地として残り、修復を繰り返して古墳時代頃迄残ったと考えられる。

第Ⅰ遺構面は古墳時代前期頃の標高(O・P)6.00～6.30m、第Ⅱ遺構面は弥生時代後期頃の同じく5.60m、第Ⅲ遺構面は弥生時代中期頃の同じく5.10～5.60mである。

3. 遺構（図版-24）

当調査地区から検出された遺構は、第Ⅰ遺構面・第Ⅱ遺構面が共に造成時にかなりの擾乱を受けていたため、第Ⅲ遺構面での検出を行なった。その結果、溝4条・土壙4基・柱

穴跡12穴が検出された。

溝

溝-1は、調査地区的最も北に位置し、東西に連なる幅約3.0m、深さ約0.2mの北肩が2段に掘られた溝である。溝内には、黒色砂質土が堆積しており、弥生時代中期(畿内第Ⅲ様式)から同後期の土器が出土した。(図版-31 図-67)なお、溝-1は、昭和61年度調査の溝-Ⅳに連なっている。

溝-2は、溝-1の南約3mを同じく東西に連なる南肩が2段に掘られた溝で幅4.7m、深さ約0.25mと0.90mを測る。溝内には、黒色粘質土・黒色砂質土・暗灰色砂質土がレンズ状に堆積し、溝-1と同じく弥生時代中期(畿内第Ⅲ様式)から同後期(同第Ⅴ様式)の土器が多数出土したが、特に同後期の土器が多く出土した。(図版-31・32 図-69・72・78~80)なお、溝-2は、昭和61年度調査の溝-Ⅳに連なっている。

溝-3は、溝-2の南約2.5mを東西からやや南に振って連なる幅3.7m、深さ0.45mの幅に比較して深さの浅い溝である。溝内には、黒色粘質土・黒色砂質粘土が堆積し、弥生時代中期(畿内第Ⅲ~Ⅳ様式)の土器が多数出土した。(図版-32 図-76・77)なお、溝-3は、昭和61年度調査の溝-Ⅳに連なっている。

溝-4は、調査地区内の最も南に位置し、他の溝とも離れて南東から北西に連なっている。溝幅2.4m、深さは溝周辺を擾乱されているので不明確であるが、層位から0.7mを測る。構内には、灰濁色砂質粘土と灰濁色粘土が交互に堆積し、僅かではあるが弥生時代中期の土器が出土した。同じく、昭和61年度調査の溝-Ⅰ'に連なっている。

土壤

土壤-1は、歪んだ橢円形すりばち状の土壤で、長軸2.0m、短軸1.6m、深さ0.26mを測る。土壤-2は、溝-2によって一部切られた橢円形すりばち状の土壤で、長軸1.6m以上、短軸1.2m、深さ0.35mを測る。土壤-3は、溝-3に接しており、長軸1.2m、短軸0.61m、深さ0.44mの橢円形すりばち状土壤である。いずれの土壤にも、黒色粘土あるいは同砂質土の堆積が見られたが、遺物は全く検出されなかった。

柱穴跡

柱穴跡は、いずれも溝-2と3の間で検出された円形、隅丸方形の径(一辺)0.25~0.35m、深さ0.4m前後の規模を測る。P-9からは、柱根と弥生時代中期の土器片、P-3からは礎板、P-6・8からは弥生時代中期の土器片などが検出されている。

4. 遺 物

当調査地区からの出土遺物は、コンテナーパットで約25箱であった。その多くは、かく包含層出土であり、弥生時代中期(畿内第Ⅲ様式)から古墳時代前期の時期のものである。また、土器量に比較して、残存状態が悪く図示できるものは少なかった。

弥生式土器

壺形上器(図版-31 図-64~72)64・65・67は、口唇部端面に凹線文を施すタイプで、64は球形の体部から強く外反する短い口頸部をもち、肩部に差し込みの把手が付く、65・67は、漏斗状の口頸部から口唇部が下方に拡張している。67は溝-1、他は包含層出土の畿内第III(新)様式である。66は、算盤玉の体部から強く外反する短い口頸部をもち、口唇部を下方に折り曲げ、2孔1体の小孔を穿つ文無の小型の壺、包含層出土の畿内第III(新)様式である。69~72は、上部で少し開く低い円筒形の口頸部が付くタイプで、69は球形の体部に突出ぎみの平底が付き、体部外面に縦ハケ、下位には叩き目が残る。70は球形の体部に強い叩きが行われている。71は胴長の体部に縦ヘラ磨きを行い、口頸部に円形竹管文が記号の様に施されている。いずれも、溝-2出土の畿内第V様式である。

壺形下器(図版-32 図-75~82)75~78は、胴長の体部に短く強く外反する口頸部をもち、口径が最大腹径と差のないタイプ。76は頸部外面に叩き目が残り、体部外面は縦ハケ整形を行っている。77はやや胴の張った体部、口唇部を面どりしており、体部中位から底部にヘラ削りが行われている。76・77は溝-3出土、75は包含層出土上の畿内第III~IV(新)様式である。78は、やや胴の張った体部にくの字形に外反する口頸部、口唇部は上下に僅かに肥厚し、端面に横ナデによる凹線文風の凹みがある。体部外面は縦ヘラ磨きが行われている。溝-2出土上の畿内第V様式である。台付無頸壺形上器(図版-31 図73~74)74は、全体の弧程しか出土していないので定かでないが、低い台部、開きぎみに立ち上がる体部に1対の把手が付き、下位に縦状文が施され、台部下位には小さな竹管文が細かく施されている。

5. 結 語

当調査地区は、弥生時代中期から古墳時代前期の間に1m近い土砂が堆積するところであった。そのためか、幅35m程の間に4条もの溝の改修を繰り返して、生活圏の拡大を計ったのであろう。しかし、他の地区に比較して柱穴跡・土壤・井戸などが検出されていない、あるいは少ないとから居住地にはならなかつたと考えられる。

図 版





郡遺跡（87-1）全景（南側から）



太田石山古墳（86-1）全景（北側から）



太田石山古墳（86-1）全景（東側から）



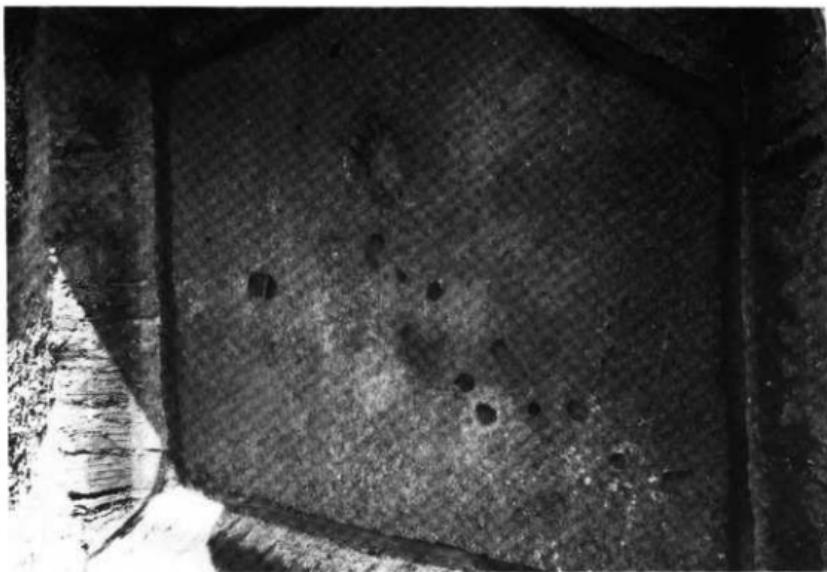
太田石山古墳（86-1）全景（南東側から）



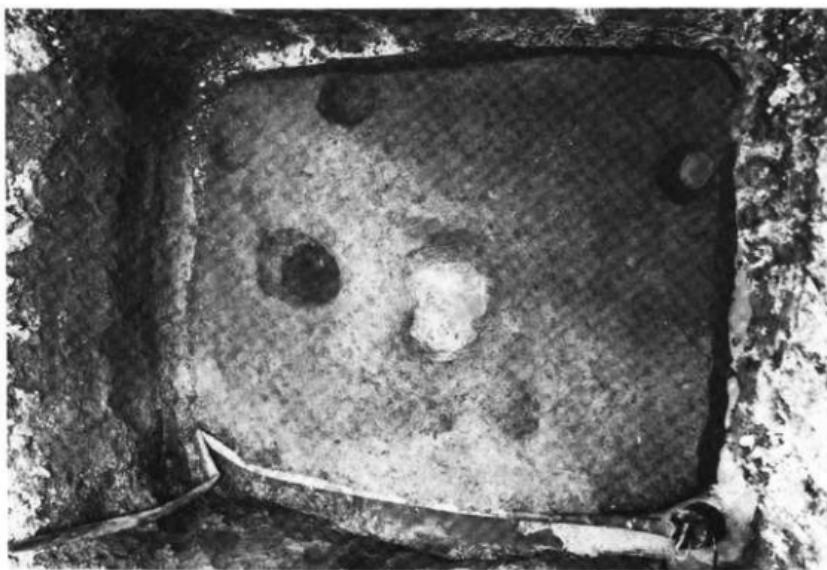
太田石山古墳（86-1）東側葺石群



太田石山古墳（86-1）東側葺石群



中条小学校遺跡（87-1）全景（北側から）



東奈良遺跡（87-2）HN H-5-I・M地区 南側地区全景（南側から）



東奈良遺跡 (87-2) H・N H-5-I・M地区 北側地区全景 (南側から)



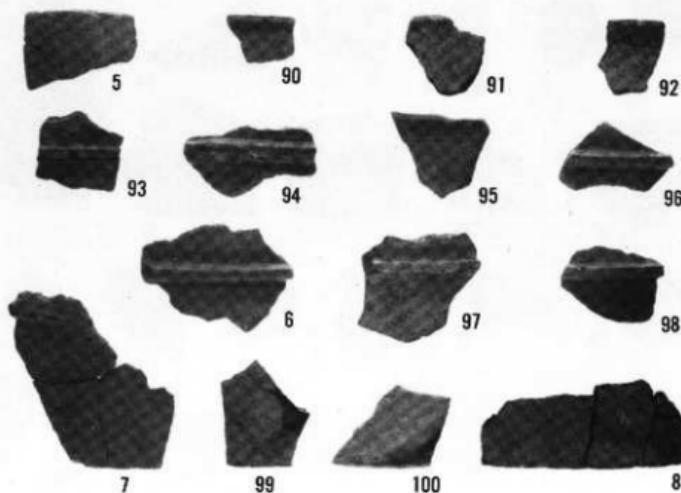
東奈良遺跡 (87-3) H・N F-5-E・I地区 全景 (北側から)



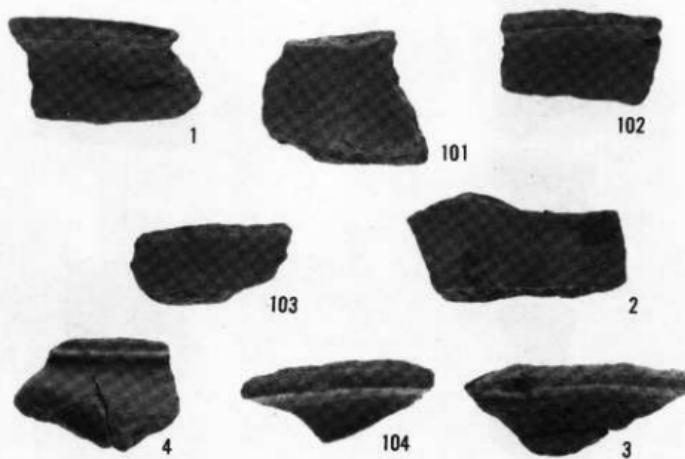
東奈良遺跡 (87-2) H-N H-5-I-M地区 焼棺墓



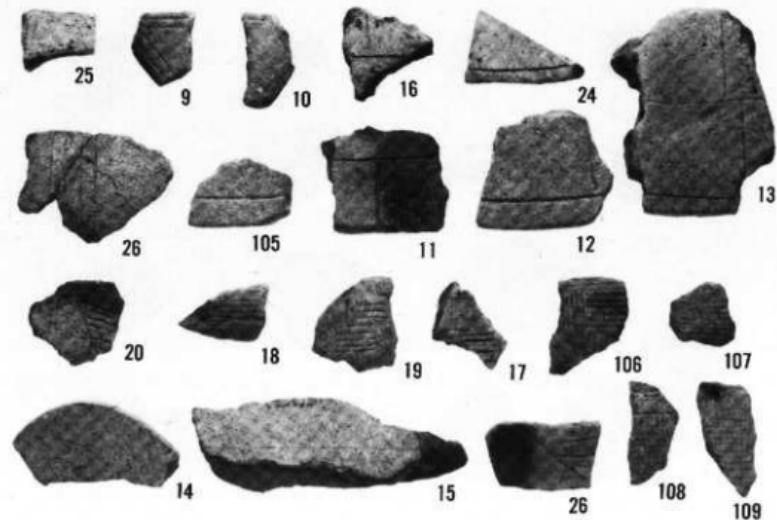
東奈良遺跡 (87-3) H-N F-5-E-I地区 溝-2・3、柱穴跡



太田石山古墳（86-1）出土の円筒埴輪



太田石山古墳（86-1）出土の朝顔形埴輪



太田石山古墳（86-1）出土の衣蓋形・形象埴輪



22



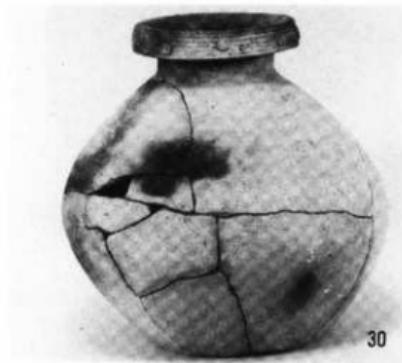
23



27



太田石山古墳（86-1）出土の形象埴輪・鉄斧



東奈良遺跡 (87-2) H・N H-5-I-M 地区 自然水路出土の土器



東奈良遺跡 (87-2) H・N H-5-I・M 地区 自然水路出土の土器・甕棺



41



45



42



46



47

東奈良遺跡 (87-2) H・N H-5-1・M 地区 自然水路出土の土器



38



55



50



53



51



52

東奈良遺跡 (87-2) H・N H-5-1・M 地区 自然水路・土塁-1 出土の土器



58



60



59



63



114



115



39



116



117

61



35



34



62



33



32



118



119



49

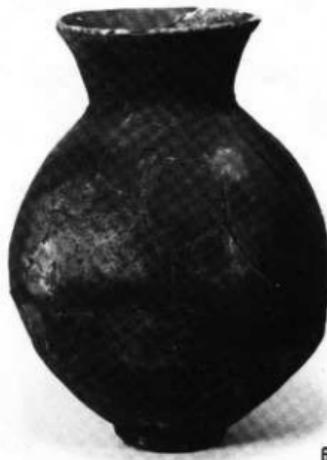
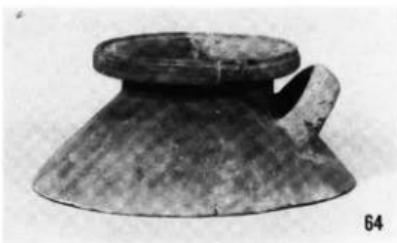


48



44

東茶良遺跡 (87-2) H・N H-5-1・M 地区 自然水路出土の土器・石器



東奈良遺跡 (87-3)H・N F-5-E・I 地区 包含層、溝-1・2 出土の土器



74



73



77



120



78



80

東奈良遺跡 (87-3) H・N F-5-E・I 地区 包含層、溝-2・3 出土の土器



85



84



83



87



121



65



122



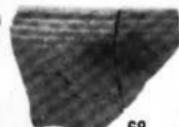
89



88



123



68



124



125



75



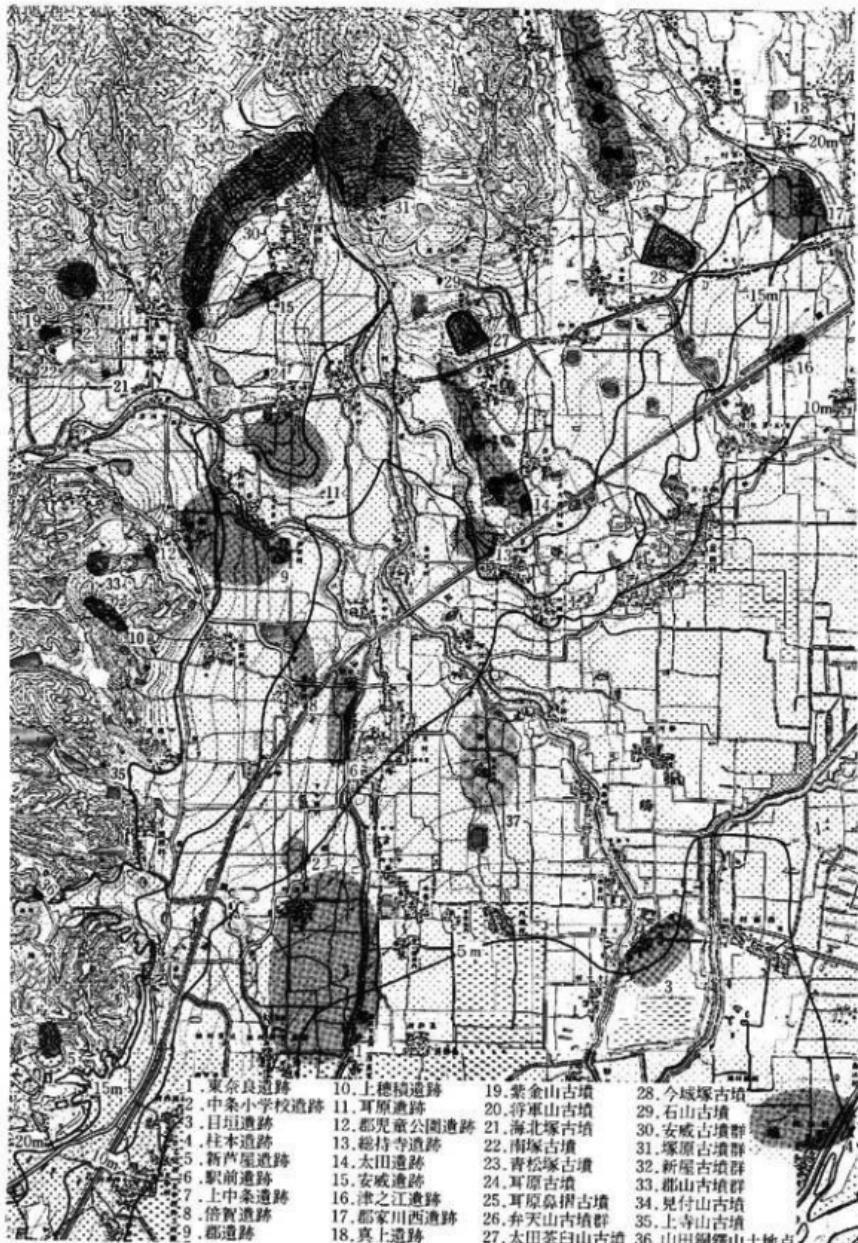
79



126

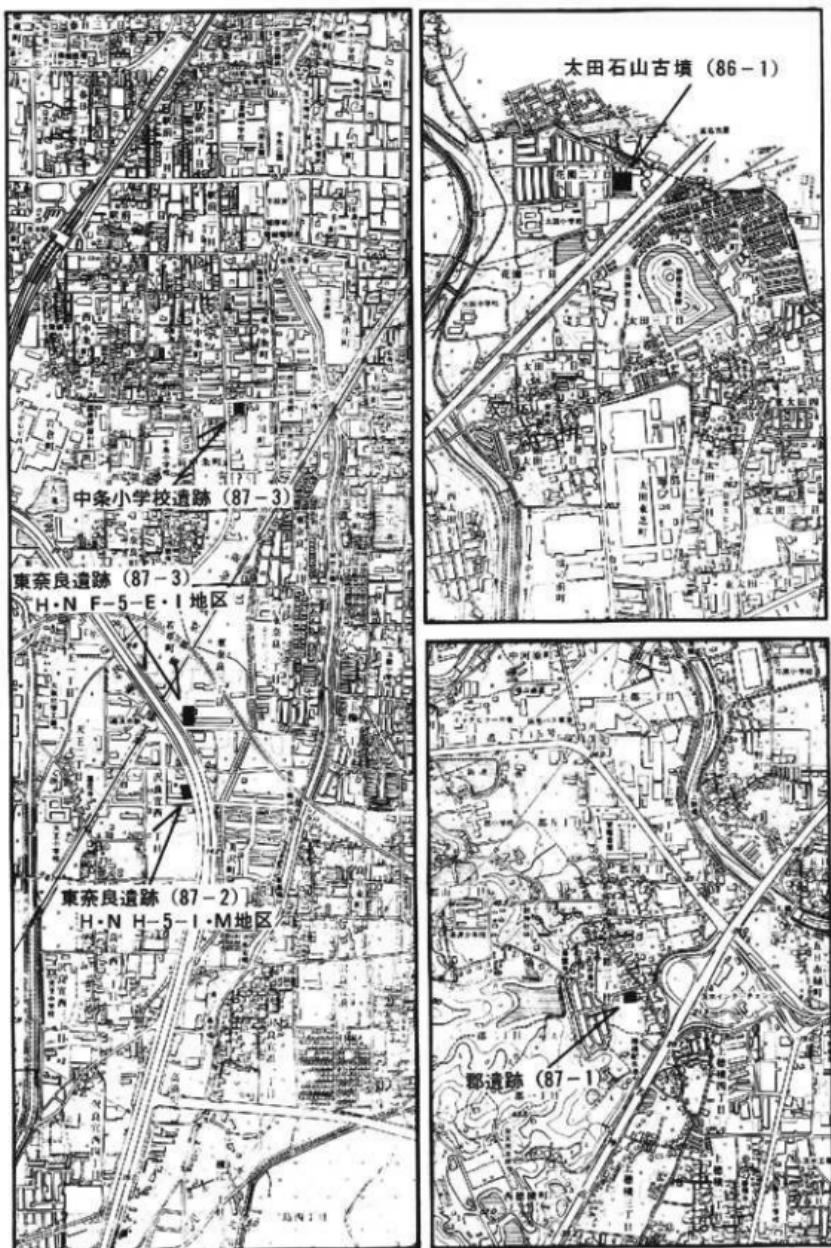
81

東奈良遺跡 (87-3) H・N F-5-E・I 地区 包含層、溝 -1・2・3 出土の土器・石器

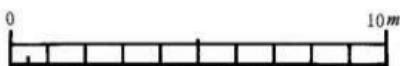
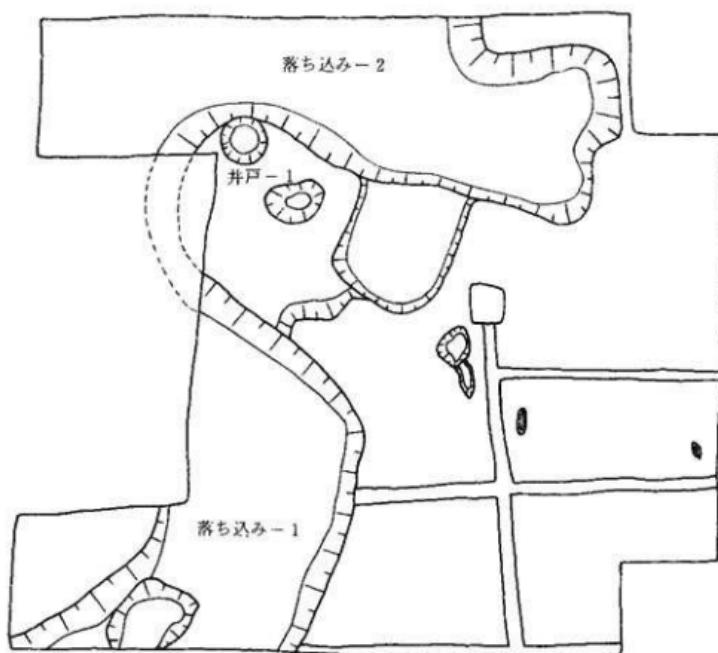
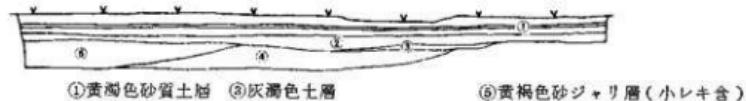


茨木市の遺跡

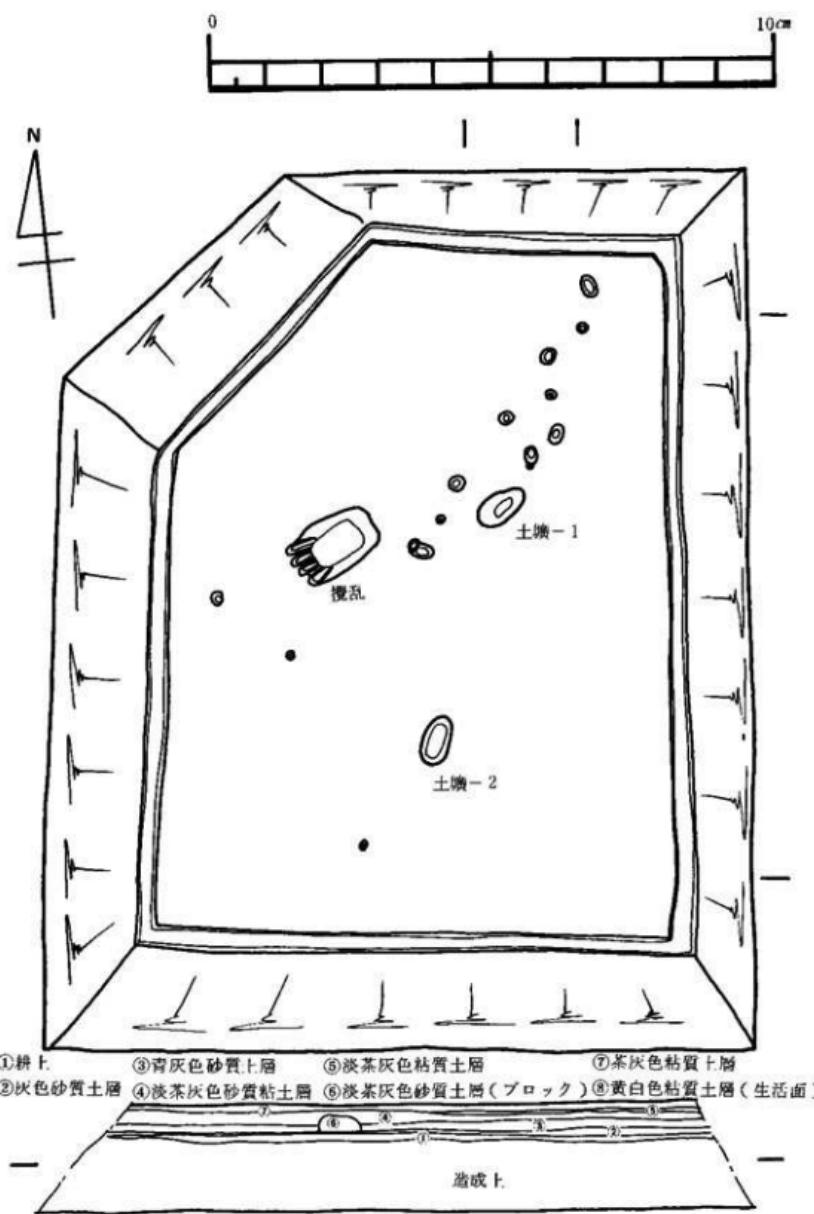
0 500 1,000 2,000m



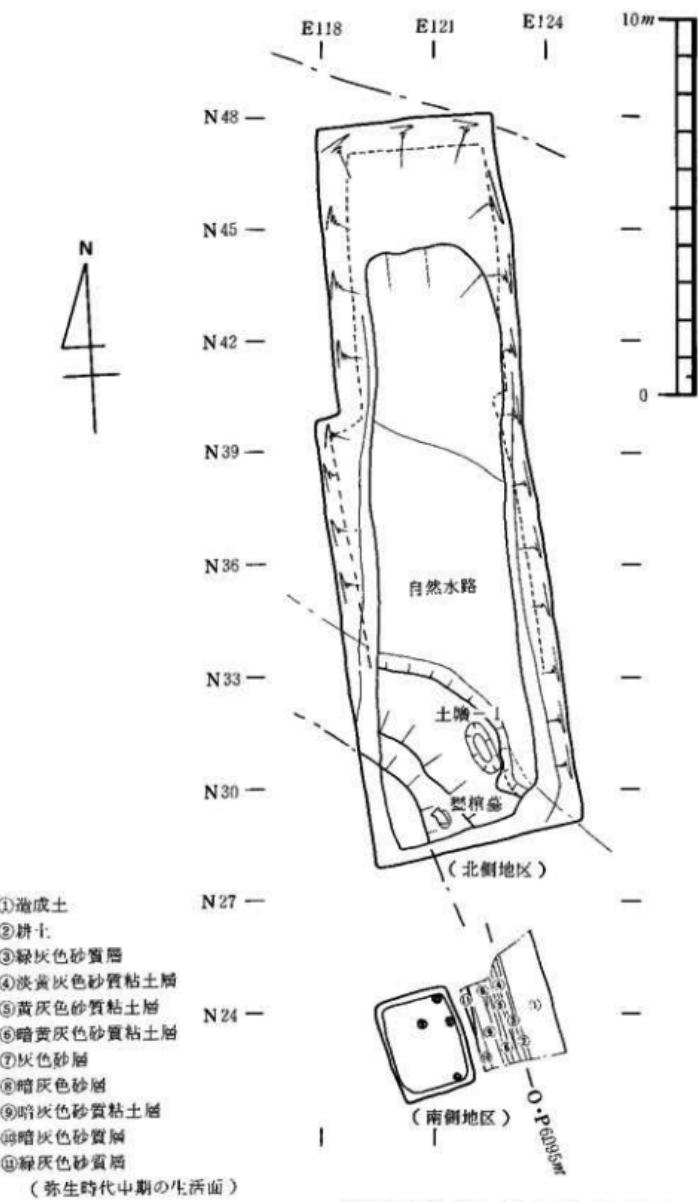
各調査地区位置図



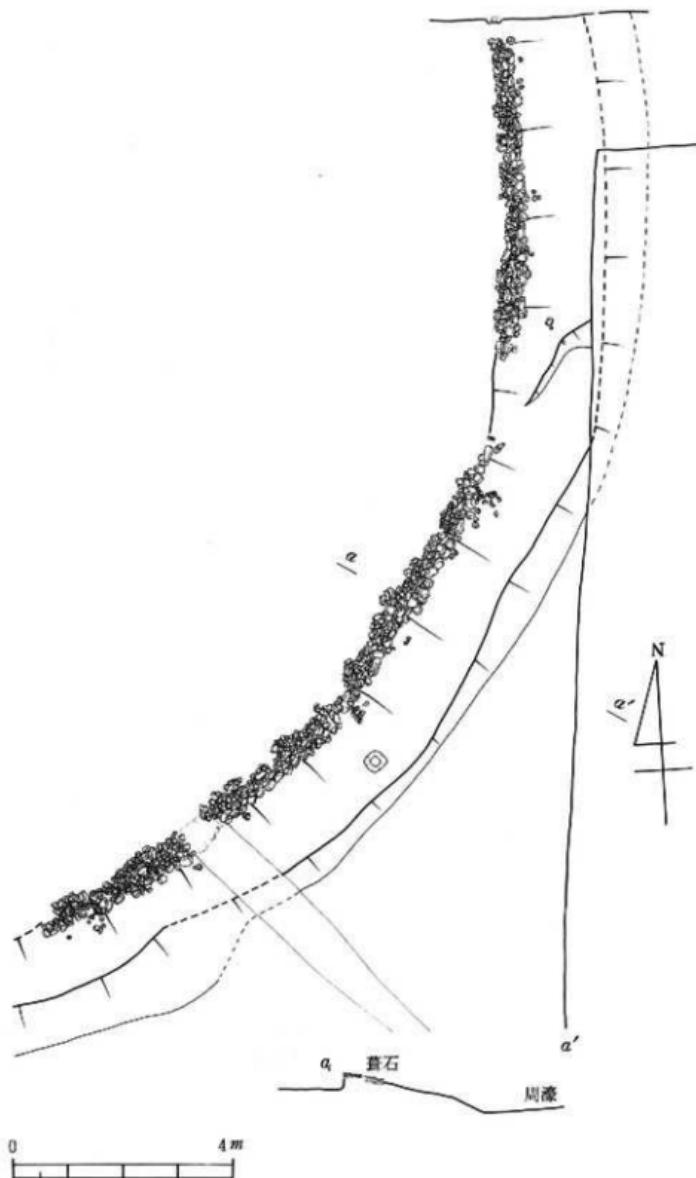
都遺跡 (87-1)



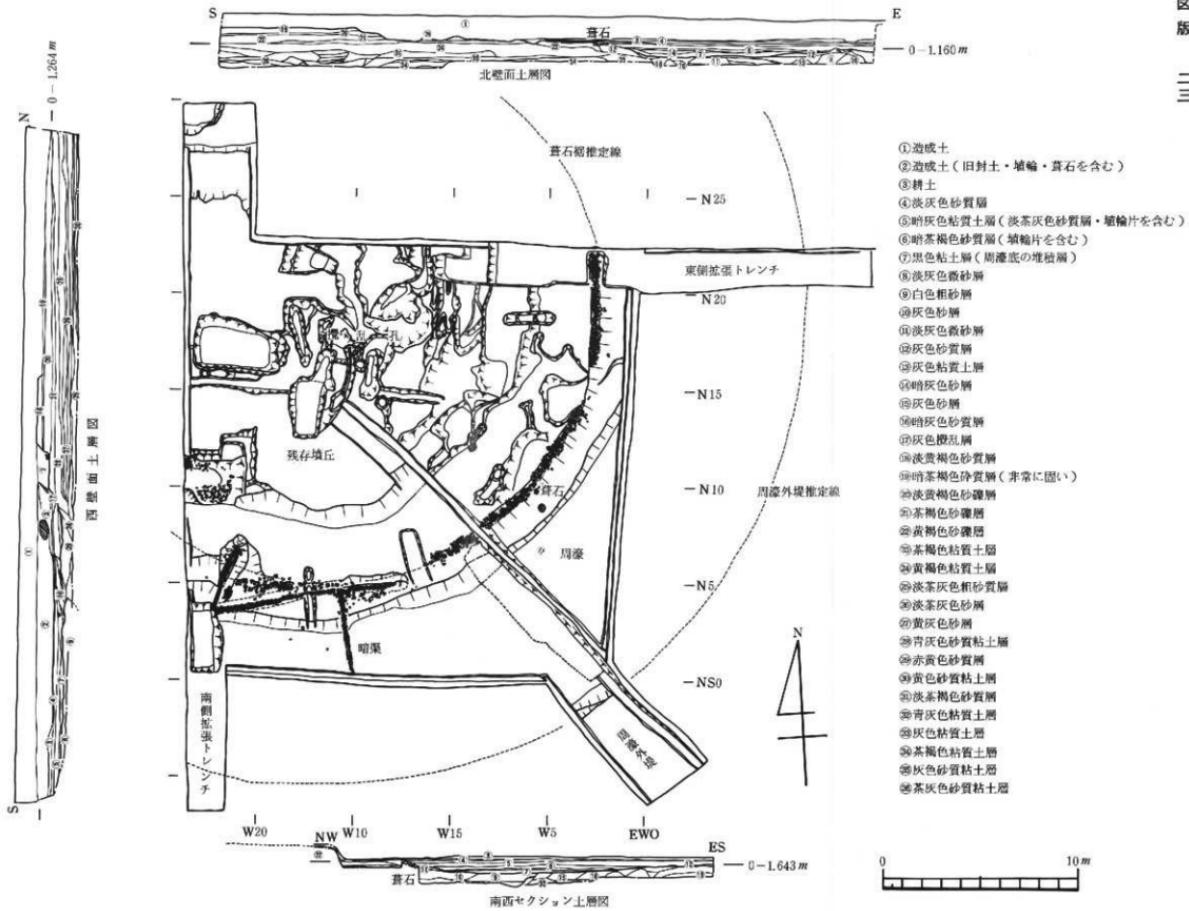
中条小学校遺跡 (87-1)

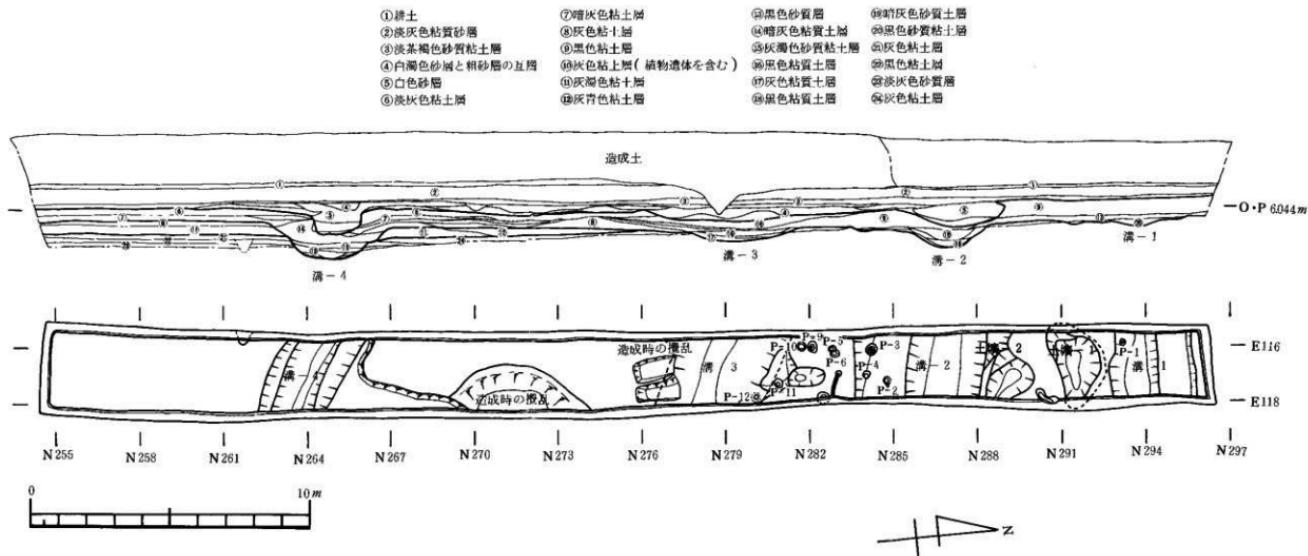


東奈良遺跡(87-2) H-N H-5-I-M地区

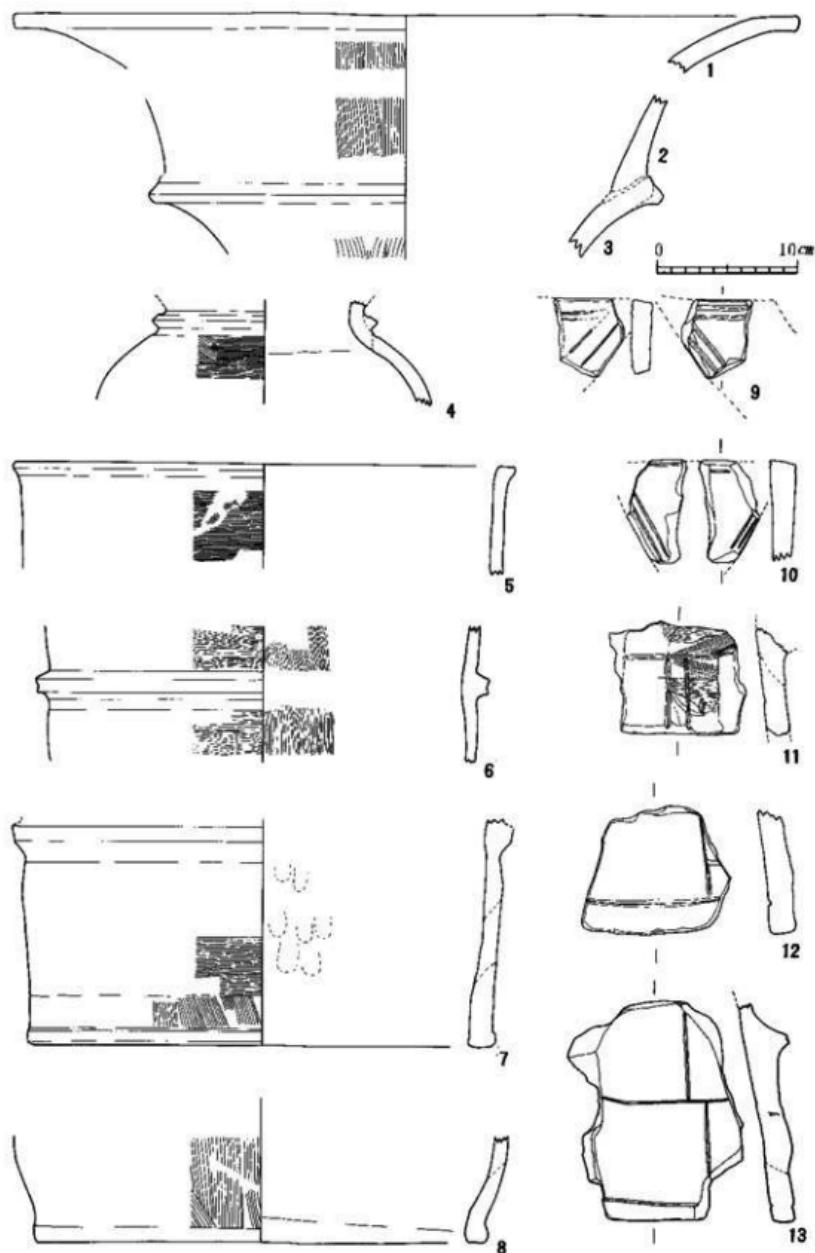


太田石山古墳（86-1）東側墓石群

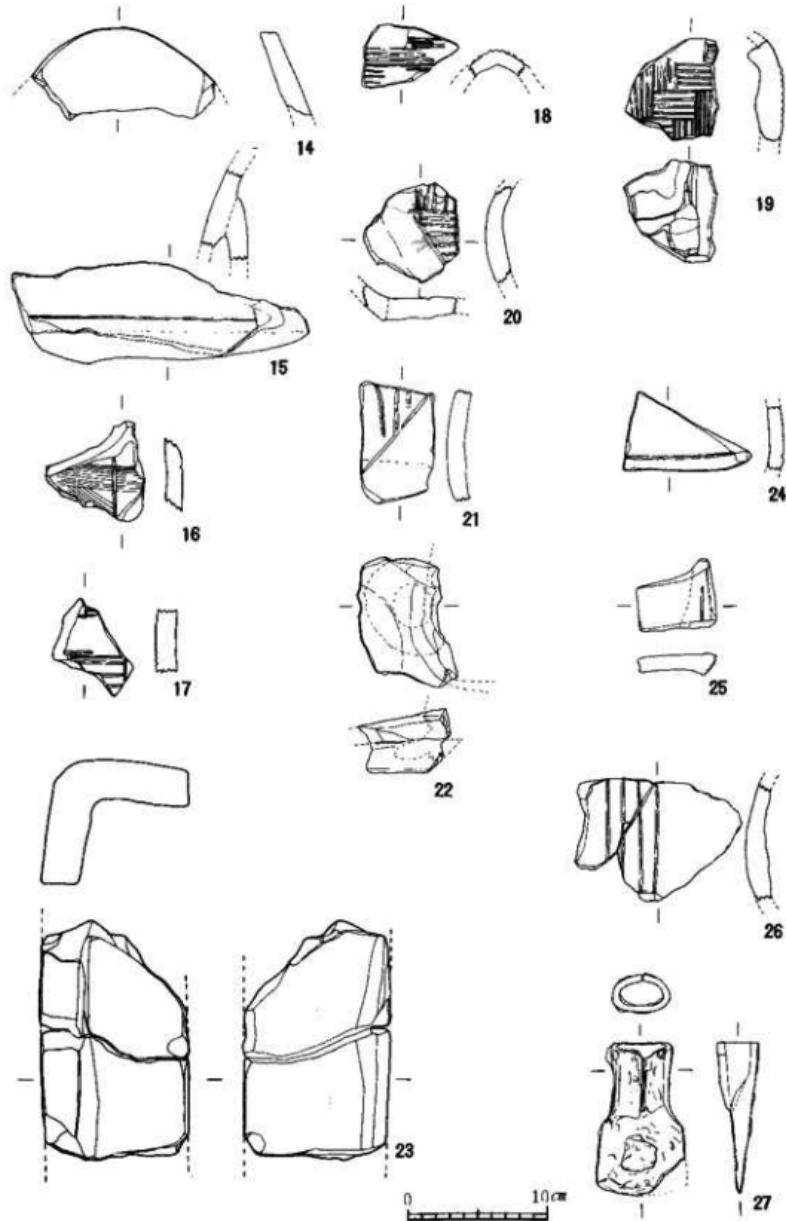




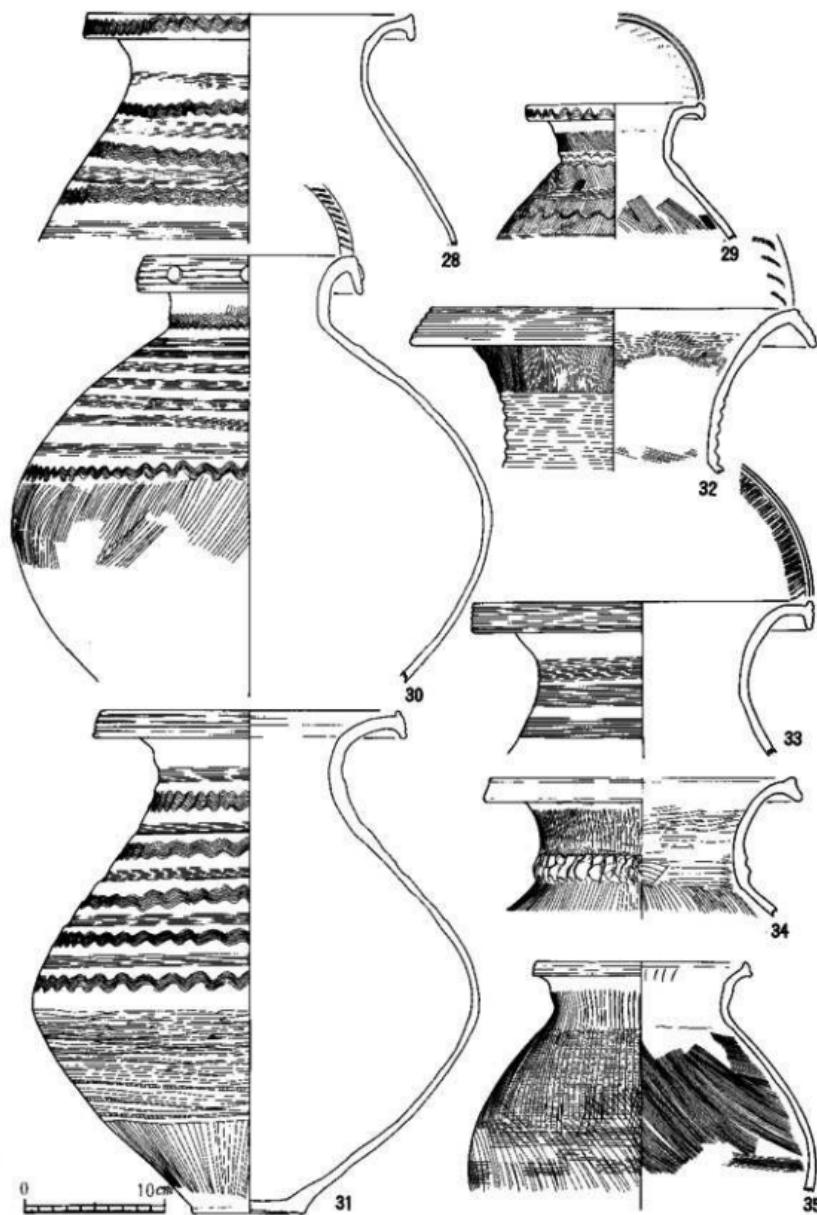
東奈良遺跡(87-3) H・N F-5-E+1 地区



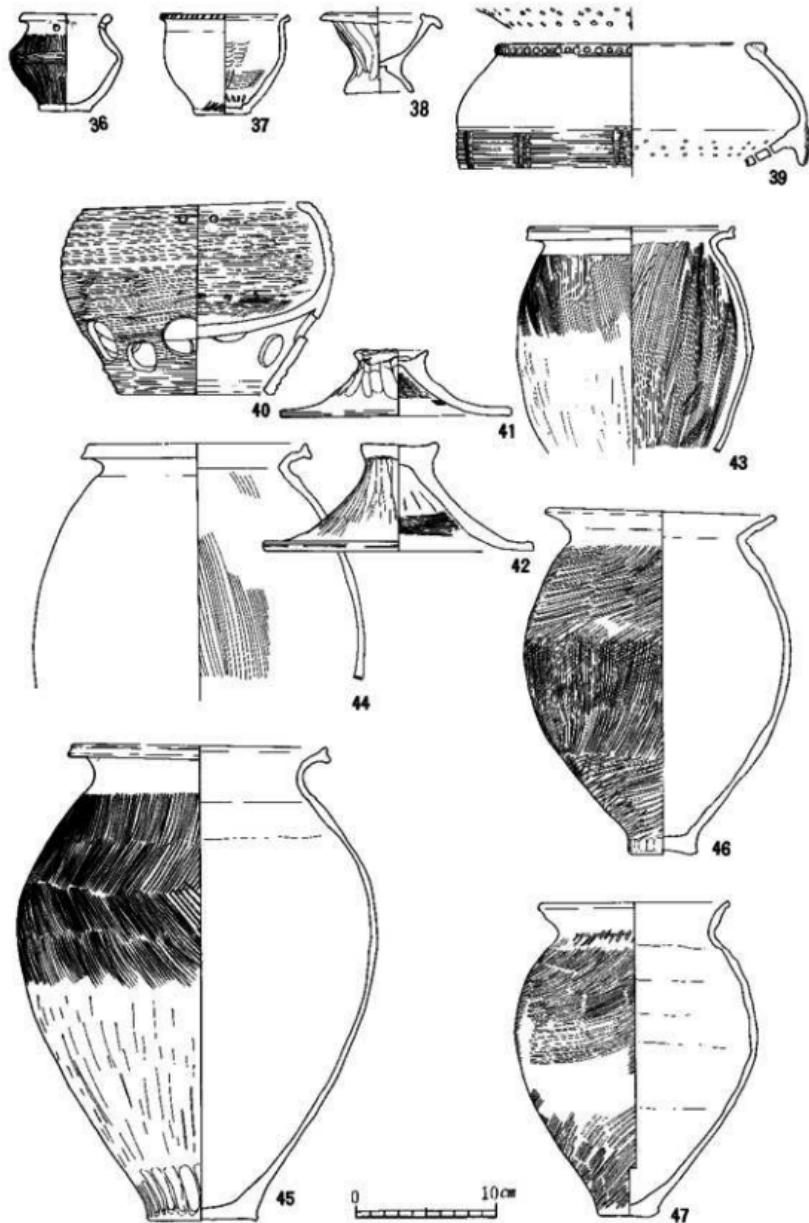
太田石山古墳(86-1)出土の円筒・朝鏡・衣蓋形埴輪

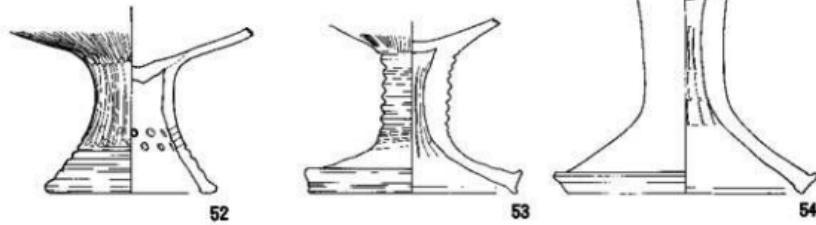
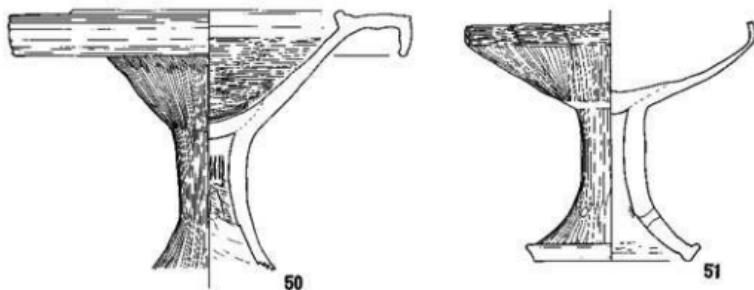
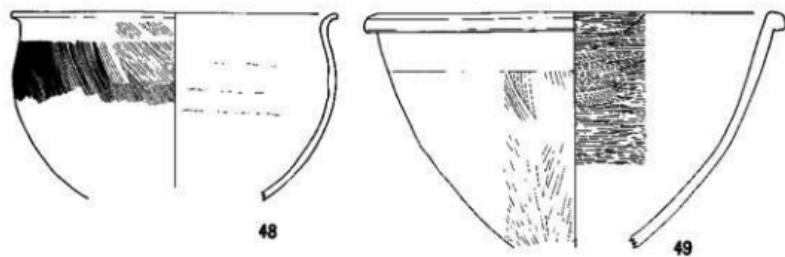


太田石山古墳(86-1) 出土の形象埴輪・鉄斧

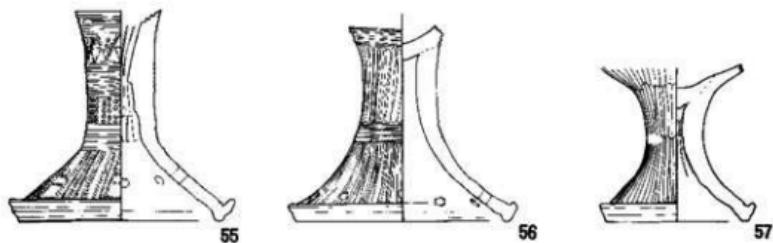


東奈良遺跡(87-2) H・N H-5-I・M地区 自然水路出土の土器

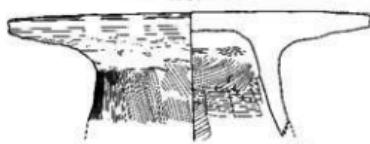
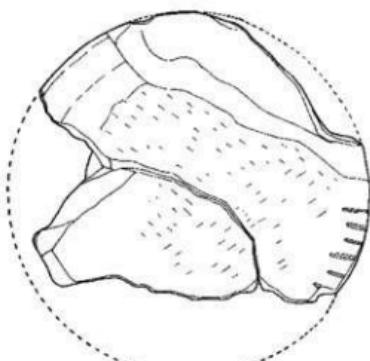




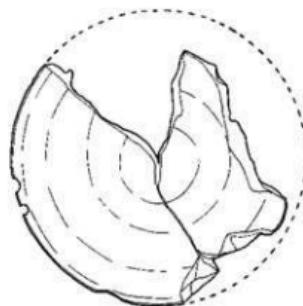
0 10 cm



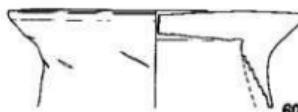
東奈良遺跡(87-2) H・N H-5-I・M地区 自然水路出土の土器



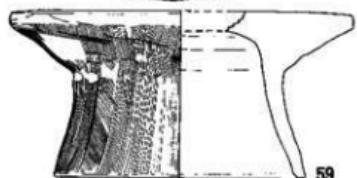
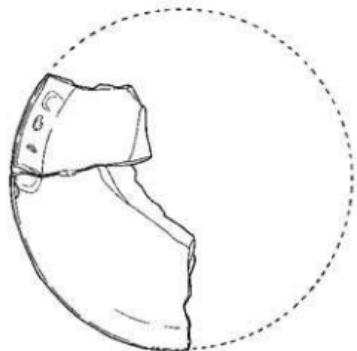
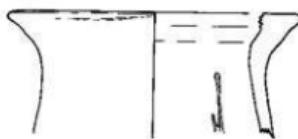
58



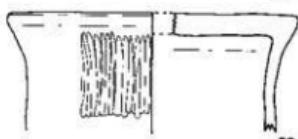
60



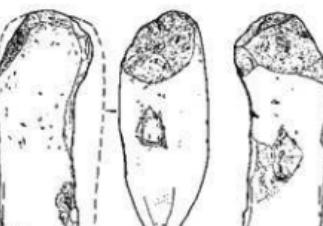
61



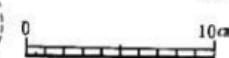
59

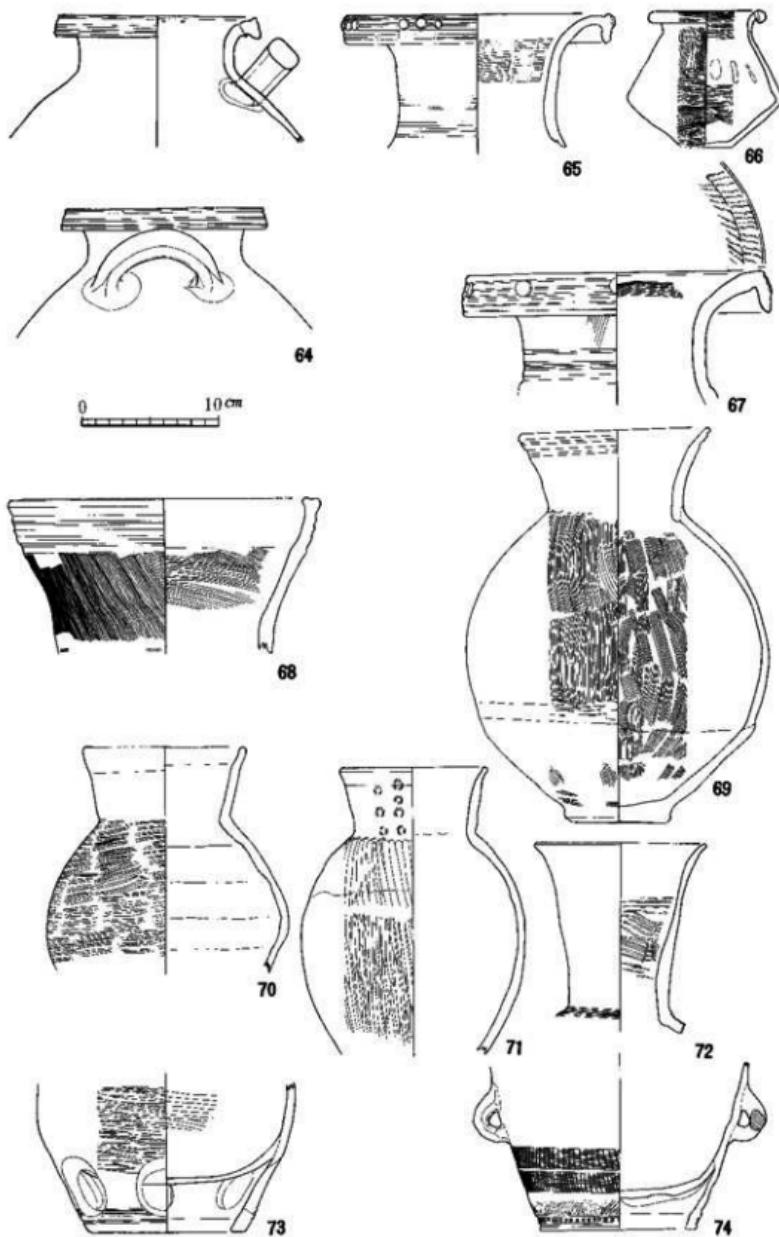


62

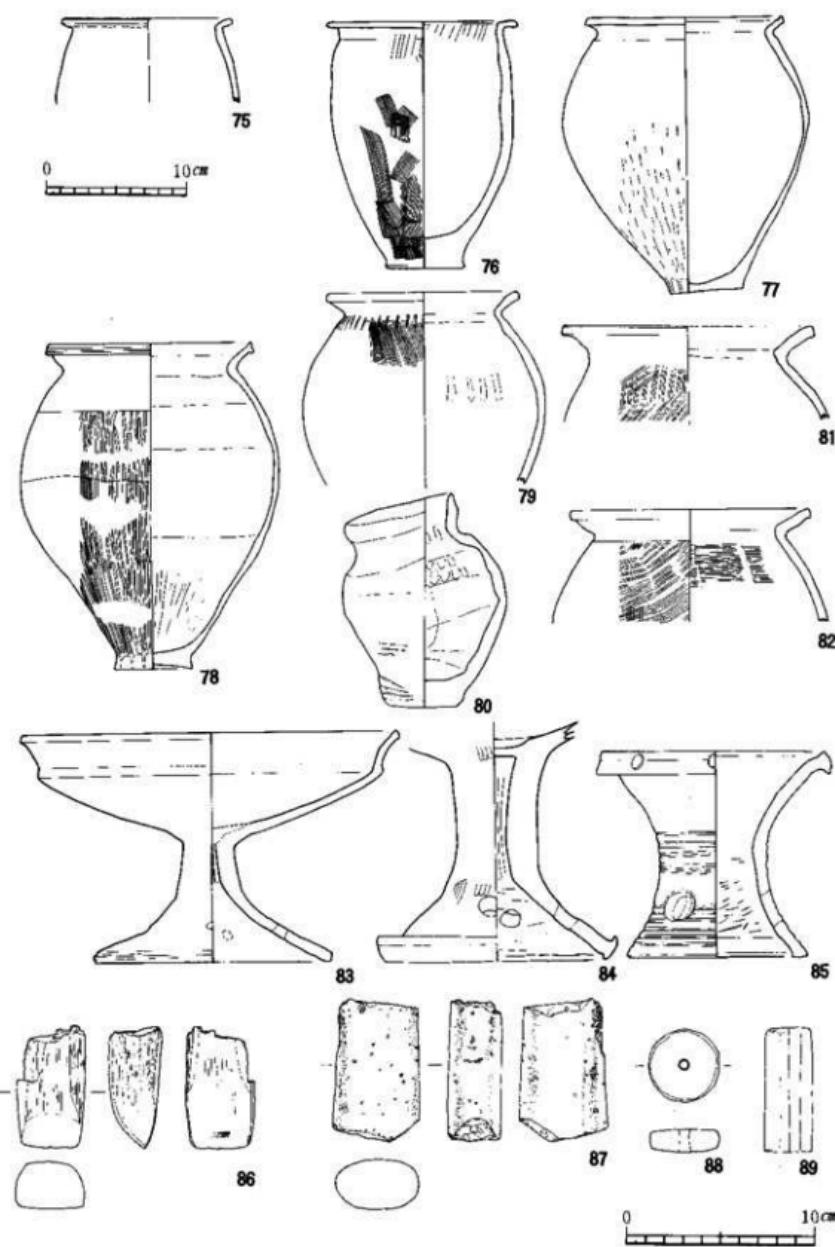


63





東奈良遺跡(87-3) H・N F-5-E・I 地区 包含層、溝-1・2 出土の土器



東奈良遺跡(87-3) H・N F-5-E・I 地区 包含層、溝-2・3出土の土器・石器・土製品

昭和62年度 発掘調査概報 I

発行日 昭和63年3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷 (有)コトブキ印刷